小松市内遺跡発掘調査報告書 XVI

古府しのまち遺跡
小　松　城　跡
本　折　城　跡

2021.3
石川県小松市埋蔵文化財センター

例　言

1. 本書は、石川県小松市内において小松市が実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 試掘調査・発掘調査・出土品整理・報告書刊行は、文化庁補助金を受けて実施した。
3. 対象となった埋蔵文化財、並びに調査地・調査原因・調査面積・調査期間・調査担当者は次のとおりである。

【古府しのまち遺跡（第４次）】（平成 28 年度）
- ［調 査 地］　石川県小松市古府町
- ［調査原因］　個人住宅建設
- ［試掘調査］　2016 9.23
- ［試掘担当］　岩本信一
- ［調査面積］　125m²
- ［発掘調査］　2016.11.28 ～ 2017. 1. 9
- ［調査担当］　下濱貴子

【小松城跡（第８次）】（平成 29 年度）
- ［調 査 地］　石川県小松市丸内町
- ［調査原因］　個人住宅建設
- ［試掘調査］　2016. 9. 5
- ［試掘担当］　岩本信一
- ［調査面積］　70m²
- ［調査期間］　2017.12. 4 ～ 2017.12.22
- ［調査担当］　宮田 明

【本折城跡（第２次）】（平成 30 年度）
- ［調 査 地］　石川県小松市上本折町
- ［調査原因］　個人住宅建設
- ［試掘調査］　2017.12.22
- ［試掘担当］　岩本信一
- ［調査面積］　115m²
- ［調査期間］　2018. 4.10 ～ 2018. 4.30
- ［調査担当］　横幕 真

4. 発掘調査は、臨時作業員を雇用して実施した。
5. 出土品整理並びに実測・製図は、臨時作業員を雇用して、令和２年度に実施した。
6. 遺構の実測及び写真撮影は、各発掘調査担当者が行い、遺物の写真撮影は、一部に田邊朋宏氏の協力を受け、ほかは各執筆担当者が行った。
7. 本書の執筆は各担当者を目次に付記し、編集は宮田が担当した。
8. 発掘調査に係る遺物・図面・写真等の資料は、すべて小松市埋蔵文化財センターで一括保管している。

凡　例

1. 本書に示す座標は平面直角座標Ⅶ系、世界測地系（測地成果 2011）に準拠している。
2. 本書に示す方位は、特に断りがない限り、座標北である。
3. 高度は標高（T.P.）で表示している。
4. 本書に示す土色はマンセル表色系に準拠している。

目　次

Ⅰ　位置と環境 …… 1
Ⅱ　古府しのまち遺跡発掘調査 ……（下濱）…… 13
Ⅲ　小松城跡発掘調査 ……（宮田）…… 25
Ⅳ　本折城跡発掘調査 ……（横幕）…… 29
写真図版１～８
報告書抄録

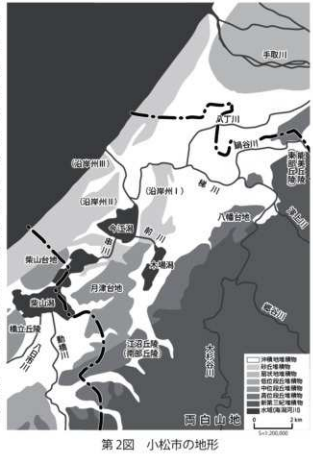
第Ⅰ章　位置と環境

第１節　地理的環境

小松市の地形は、その形態や発達状況、面の連続性等により、東から山地（両白山地）、丘陵地（能美丘陵）、台地（八幡台地・月津台地・柴山台地）、低地（能美低地：後背湿地・自然堤防・沿岸州Ⅰ・沿岸州Ⅱ・沿岸州Ⅲ）、扇状地に区分することができる。これらの地形は、小松市周辺において北西－南東の圧縮を受けながら全体的に隆起している大地の上で、第四期半ば以降に繰り返されてきた地球規模での約 10 万年周期の温暖・寒冷の繰り返しによる気候変化（氷期－間氷期サイクル気候変化）、これに伴う海面変化の影響によって形成されたものである。

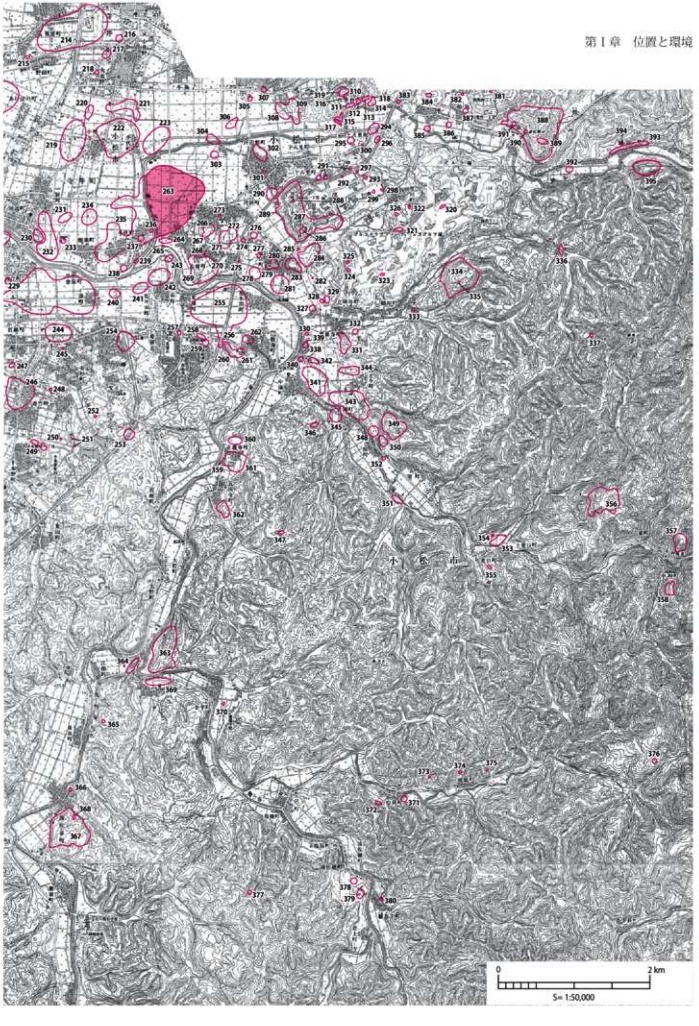
小松市における台地は、現在とほぼ同様の気候であったと推定されている最終間氷期、その中の約 12 万年前と 10 万年前に形成された海成段丘面からなっている。この当時には、現在の丘陵地の縁辺まで海域となっていたと考えられている。その後に訪れる地球規模での寒冷化が進んだ最終氷期には、海面低下に伴う河川の下刻により、これらの台地は大きく掘り込まれ、月津台地と八幡台地や柴山台地との間には、谷地形が形成される。ボーリング試料の花粉分析により、当時の小松市の植生は、冷温帯上部～亜寒帯下部に相当する広葉樹と針葉樹の混交林が広がっていたことが推定された。最終氷期の終了後には気候が温暖化し、海面が急激に上昇することにより、縄文海進の影響が小松市周辺にも及び、台地、丘陵地の縁辺まで海域が広がったと思われる。この際には、最終氷期に形成された谷地形も海底となった。縄文海進のピーク頃(約 7,300 年前）には、小松市周辺に存在した内湾は、水深が現在の梯川と前川合流部付近で約 20m、今江潟付近で約 17m、木場潟周辺では約 6 ～ 7m 程度であったと考えられる。これらの海域は、約 7,000 年前以降には、小松空港が立地する地形である沿岸州Ⅱが発達し、日本海から切り離されることとなり、潟湖（ラグーン）の原形がつくられる。能美低地は、沿岸州の内陸側に存在する水域が河川から供給された堆積物により埋積されたものであり、その際の埋め残された水域が海跡湖である加賀三湖（木場潟・今江潟・柴山潟）となっている。また、小松市市街地が位置する沿岸州Ⅰの形成は、少なくとも約 7,000 ～ 5,300 年前には終了している。

第1図　小松市の位置



第 2図　小松市の地形

第３図　遺跡分布図


0
2 km
S= 1:50,000

第２節　歴史的環境

１　旧石器～縄文時代

最終氷期が 11,700 年前に終わり、後氷期の温暖化に伴って縄文海進と呼ばれる海面上昇が進行し、前期前葉にもっとも温暖化した時期を迎え、当時の海面は現在よりも２～3m 高かったことが明らかにされている。旧石器後期～縄文草創期は晩氷期に、縄文早期は海進期に相当し、自然環境が安定した前期中葉～晩期においても地球規模での寒冷化を３度経ている。旧石器時代後期から縄文時代は自然環境が大きく変わる時代にあたっており、環境変化に適応しながら人びとは狩猟・漁労・植物採集活動を主生業とし、生活を送ってきた。

小松市域においては、旧石器後期～縄文草創期の石器が東部丘陵の八里向山遺跡群 (310 ～ 319) や月津台地の念仏林遺跡 (37)・矢田野エジリ古墳 (55) から出土しており、丘陵上が生活や狩猟活動の場となっていたことがうかがわれる。早期末～前期初頭には六橋遺跡 (369) や柴山水底貝塚 (1) で定住生活が始まり、前期前葉に最高の海水準に達し、海水面が安定した前期中葉から居住が再開されて木場潟を望む大谷山貝塚 (156) が築かれた。前期を通じて沿岸州が発達し、木場潟・今江潟・柴山潟の加賀三湖の原形が形成された。中期前半には柴山潟を前面にした月津台地の念仏林南遺跡 (38)・念仏林遺跡 (37) で人びとが暮らし始め、中期後半からは大杉谷川・滓上川流域の河成段丘に生活の場を求めて移住している。さらには梯川・鍋谷川流域の能美低地でも集落が営まれていた。

２　弥生時代

八日市地方遺跡 (200) が、本格的な稲作社会の指標となる環濠集落として成立するのは、弥生時代中期初頭、紀元前 350 年ごろのことである。西から日本海経由で櫛描文土器を携えた人々と地元で条痕文土器を使っていた人々が、協働でムラづくりを行った。環濠集落形成当初から、農具など稲作文化を支える諸道具が網羅的に生産され、計画的に新時代のムラづくりがおこなわれたことがわかる。集落内では、市の南部で産出する良質の碧玉を原材に管玉生産が大規模に行われ、日本海を通じた西の社会との交換財として流通した。東アジア最古となる柄付鉄製鉇（やりがんな）の出土は、交換財の一つが最先端の鉄の道具であったことを物語っている。小松式土器が成立した集落の最盛期には、まさに東西文化の結節点の役割を果たした。近年、北陸新幹線建設に伴う園町遺跡 (202) の発掘調査で、同時期の環濠集落が発見された。沿岸州上の至近距離で環濠集落が形成されていることは、拠点集落の機能を考える上で再検討を迫るものである。中期後葉（紀元前 100 年頃）に、西から凹線文土器とよばれる新しい土器型式が波及しはじめると、八日市地方遺跡は急速に縮小から解体へと向かう。同時に小規模な集落が梯川やその支流へと分散したと考えられるが、遺跡数は低調である。

やがて弥生時代後期前半（紀元後 100 年頃）になると、木器生産が盛んに行われた白江梯川遺跡 (226) や、北陸でも最古級の鉄鍛冶と銅鏃の鋳造関連資料が発見された一針 B 遺跡 (231) など、ある程度ものづくりの中心的な役割を担った集落が登場しはじめる。後期後半には、梯川の中流域を中心に遺跡は拡散･急増し、流域は県内屈指の遺跡密集地となっていく。低地だけでなく、八幡遺跡 (254) や吉竹遺跡 (246) など、台地上でも遺跡が展開しはじめており、新たに加賀三湖に囲まれた月津台地でも、念仏林南遺跡 (38) や額見町西遺跡 (27) といった高台の集落も誕生している。

また、後期後半の一時期、低地との比高が 20m を越えるような急峻な丘陵地で、短期的な集落が認められるようになる。いわゆる高地性集落と呼ばれ、古墳時代前夜の緊張状態を示すとも考えられているが、梯川流域の集落が全て高所に移動するわけではなく、平野部の遺跡が並存している。河田山遺跡 (286) は、明らかに防御機能を備えた集落と考えられるが、一方、大型住居や倉庫群を伴いな

がら、複数集落で構成される八里向山遺跡群 (310 ～ 319) は、丘陵上に拠点的な役割を担う集落が存在したことを示している。これらの丘陵地では、古墳時代が幕を開けると同時に集落は終焉を迎え、台頭した首長たちによる古墳造営の舞台へと変わっていく。

3　古墳時代

古墳の造営主体の多くは、弥生時代以来の農業生産を基盤とした集団を統率する首長層であった。南加賀では、北の能美低地と南の江沼低地（加賀市域）といった二つの穀倉地帯が勢力基盤となり、それぞれの低地を望む丘陵地で古墳を築造した。こうして能美と江沼両地域の首長は、南北で拮抗する勢力圏を形成したのである。

能美地域の古墳群は、古墳総数が 200 基を越えるとされ、わけても能美市の和田山・末寺山・秋常山など独立小丘上の古墳群は、北陸最大級の前方後円墳を擁して中核を成している。一方で、梯川を望む小松市東部丘陵地には総数 60 基を越える河田山古墳群 (287) があり、地域支配の補完関係が注目される。能美低地中央に位置する千代・能美遺跡 (234) では、前期の首長居館とされる遺構を検出しており、能美勢力の中枢部を考える上で重要である。

中期の能美地域は、北陸有数の甲冑集中地域で知られる。埴田後山古墳群 (283) や八里向山Ｆ古墳群 (315) など、中・小規模の円墳を主体とする古墳群でも出土し、倭王権との軍事的関係を契機とした新興勢力の台頭が想定される。

後期になると、これまで古墳の空白地帯であった加賀三湖に囲まれた三湖台地域（月津台地）で、突如として小型前方後円墳を中心とする多数の古墳群が誕生する。大量の人物埴輪が出土した矢田野エジリ古墳 (55) が著名であるが、その勢力基盤については謎が多い。この頃、台地に連なる丘陵地で須恵器生産が始まり、さらに越前から継体天皇が擁立されるなど、手工業生産や加賀三湖の水運を意識した勢力構図の再編が進行したようだ。

終末期の南加賀では、墳丘を持つ群集墳の形成がほぼ終息し、加賀市法皇山のような横穴古墳群のみが継続する。そして、中央氏族の関与が想定される特定階級の墳墓として、河田山の切石積横穴式石室の築造、最後は横口式石槨を持つ那谷金比羅山古墳の築造をもって古墳時代は幕を閉じる。

4　古代

南加賀地域には、能美地域古墳群の母体となる能美平野の集落遺跡群と江沼地域古墳群の母体となる江沼盆地の集落遺跡群とがあり、それが飛鳥時代以後も継続的に在地首長層の地盤として営まれ、継続的に集落経営がなされた。

沖積低地の伝統的な集落遺跡に対し、7 世紀になって突如、月津台地に三湖台地集落遺跡群が面的な広がりをもって出現する。当遺跡群は、製鉄や製陶等の手工業生産に生業を置く集落であり、竪穴建物跡付設のカマド形態や出土する移民系土師器の形態から、朝鮮系移民を軸とする政治的移配の移民集落群と位置づけた。

三湖台地集落遺跡群の潟を挟んだ東側丘陵には、7 世紀以降に生産を活発化させる南加賀製陶遺跡群と当期に砂鉄製錬を開始する南加賀製鉄遺跡群が広く分布する。製陶遺跡群は 5 世紀末から操業を始めるが、7 世紀に新たな技術を取り入れ生産拡大しており、7 世紀後半から 8 世紀へと製鉄もあわせ更なる生産拡大を図る。製陶は 10 世紀中頃まで、製鉄は 12 世紀まで連綿と操業する北陸最大規模の古代手工業生産地帯であり、三湖台地集落遺跡群を丘陵部製陶製鉄遺跡群の母体集落として一体的に経営されたと理解する。

5　中世

中世前期に区分される平安時代末から南北朝時代（12 世紀中頃～ 14 世紀中頃）、耕地が展開した低地では、地頭や武士などの在地領主をはじめとして、自作農の名主なども点在的な小集落を営み、耕地を見下ろす丘陵には、経塚や墳墓など祈りの場が設けられた。なかでも、佐々木ノテウラ遺跡 (241) の区画溝と住宅は、得橋郷で敷設された中世条里の確認事例として注目できる。古府シマ遺跡 (269) は、立地とその歴史的な環境、鎌倉期に盛行した集落規模に加えて、高級な中国製陶磁器なども潤沢に受容した生活様相から、加賀の国衙に深く関連した集落遺跡として評価できる。また宮の奥経塚 (331) は、仏教的な作善として法華経などを埋納した里山の聖地で、鍋谷川中流の八里向山中世墓群 (317) は、得橋郷の在庁「弥里介」の奥津城と一族の葬地とみられる。

中世後期の室町時代から戦国時代（14 世紀末～ 16 世紀後半）になると、白江荘周辺の在地領主は、屋形の一角に堀割の開削をおこない、付随した町場では下駄や曲物職人などの集住を進めた。また交通の要衝となる丘陵地では、戦時の城郭が整備され、波佐谷の高台には、本願寺一家衆寺院の拠点として土塁を構えた城郭寺院 (367) が造営された。他方、街道が通過していた本折では、特産の絹織物で知られた町場が、幸町遺跡 (197) の周辺にも広がり鍛冶職人の集住が見られた。さらに、中世後期の出土品を見ると、香炉や花瓶などの仏具、火鉢や行火の暖房具、茶の湯の広がりを示す茶道具の茶壺・風呂・茶臼などの用具が新たに確認できる。これは日常の生活文化と嗜好性が、急速に広まったことを示している。

6　近世～現代

小松城 (195) が史料に初めてみえるのは天正 11 年（1583）で、村上頼勝の在城が知られる。その後慶長 3 年(1598)に丹羽長重が入城し、慶長 5 年からは前田氏の所有となった。寛永 16 年(1639)、前田利常は隠居の地を小松に定め、城と城下の整備に着手している。いま遺構として確認できる小松城は前田時代のものとみられる。小松城の発掘調査は、大きな面積では小松高校改築に伴うものがある。同校は本丸、二の丸に位置を占めており、数次にわたる調査によって、本丸側石垣、二の丸石垣のほか結桶を内部施設とする井戸群、掘立柱建物などを検出した。明治 4 年（1871）に始まった破却により遺構はほとんど残っていないとみられていた小松城であるが、石垣の基部や井戸が地中に残存することが各所で確認された。また、住宅建設等にともなう数か所の発掘調査で、三の丸や中土居の石垣や堀が確認された。このうち、市立博物館収蔵庫建設にともなう調査では、絵図にみえない石垣が検出され、小松城の構造を再検討する知見が得られた。

利常入城にともなう藩士移住により町割が決まった城下では、大川遺跡 (196-1) ではじめて大規模な発掘調査が行なわれた。北国街道の両側に形成された泥町と呼ばれた城下の町屋敷で、街道に面して連なる「短冊形」の屋敷が発掘された。町屋敷のひとつから古九谷窯製品がまとまって出ており、焼物商の存在が想定されることとなった。梯川を渡った北国上街道は西に方向を変え泥町に向かう直線道となるが、ここでは街道および新町堀に架けられた梯小橋の橋台石垣を発掘した。街道は 17 世紀前半以降、数次にわたって路盤がかさ上げされており、路面には玉砂利が敷かれていた。小橋の橋台石垣は凝灰岩の切石を積んだもので、小松町の玄関口にふさわしい堅固な造りとなっている。

若杉窯 (245) と八幡若杉窯 (254) は能美郡における再興九谷を代表する窯である。若杉窯は文化 8 年（1811）から磁器生産を開始し、文化 13 年に藩営になり生産を拡大した。陶器を主体とし、染付、白磁、青磁、色絵などの焼成を行っていたが、天保 7 年（1836）、火災により機能を失った。同年、隣接する八幡村で開窯したのが八幡若杉窯で、ここから出た碗にある「天保七」の紀年銘は移転・開窯を裏付ける資料となっている。

引用文献

市史編集委員会 2020『新修小松市史』資料編 17 考古 より、第一章～第八章の概説の一部を抜粋掲載

第 1 表　遺跡地名表

No	名称	種別	時代	備考
1	柴山水流貝塚	貝塚	縄文	
2	柴山中世墓	その他の墓	中世	
3	柴山神社遺跡	散布地	不詳	
4	柴山城跡	城館跡	中世	
5	一白A 遺跡	散布地	古墳～古代	
6	柴山貝塚	貝塚・集落跡 集落跡	縄文 古代	加賀市指定史跡
7	柴山水流遺跡	貝塚	弥生	柴山出村遺跡 A 地点に所在する貝塚
8	柴山出村遺跡（A 地点） 柴山出村遺跡（B 地点）	集落跡 集落跡	弥生 古代～中世	柴山貝塚に隣接する地点
9	山の上遺跡	散布地	縄文	
10	佐美経塚	経塚	不詳	
11	日太経塚	経塚	不詳	
12	合河遺跡	散布地	不詳	
13	勅橋遺跡	散布地	古代（平安）	
14	猫橋遺跡	散布地 集落跡	縄文 弥生～中世	
15	都もどり地蔵遺跡	散布地	古代	
16	勅橋屋敷	屋敷跡	中世（室町）	
17	梶井衛生センター遺跡	散布地	古代	
18	梶井遺跡	散布地	古代	
19	分校 A 遺跡	散布地	古墳	
20	分校 B 遺跡	散布地	古代（平安）	
21	分校山王古墳群	古墳	古墳	円墳 2
22	分校カン山古墳群	古墳	古墳	前方後円墳 3、円墳 10、方墳 6
23	分校高山古墳	古墳	古墳	前方後円墳
24	打越 A 遺跡	散布地	縄文	
25	打越 B 遺跡	散布地	弥生	
26	打越城跡	城館跡	中世（安土桃山）	
27	額見町西遺跡	集落跡	弥生～中世	
28	茶臼山 A 遺跡 茶臼山 B 遺跡	散布地 散布地	不詳 縄文	
29	茶臼山祭祀遺跡	その他（祭祀）	古代（奈良）	
30	月津オカ遺跡	散布地	古墳・中世	
31	月津 A 遺跡	散布地	古代（奈良）	
32	額見町遺跡	散布地 集落跡	縄文 古墳～中世	
33	額見神社前 A 遺跡	散布地	古墳	額見町遺跡の一部
34	額見神社前 B 遺跡	散布地	縄文	額見町遺跡の一部
35	中町遺跡	散布地	縄文・不詳	
36	月津新遺跡	散布地	縄文・古代	
37	念仏林遺跡	集落跡	縄文	
38	念仏林前遺跡	集落跡	弥生～古墳	
39	矢田新遺跡	集落跡	古代（奈良）	
40	刀何理遺跡	散布地 集落跡	縄文 古代～中世	
41	矢田 A 遺跡	散布地	縄文	
42	矢田 B 遺跡	散布地	古墳	矢田野遺跡の一部
43	矢田野遺跡	集落跡	古墳～古代	
44	白山ほぞ古墳	古墳	古墳	前方後円墳
45	左門殿古墳	古墳	古墳	円墳
46	茶臼山古墳	古墳	古墳	円墳、2 段築成
47	興宗寺古墳	古墳	古墳	円墳
48	念仏塚古墳	古墳	古墳	円墳
49	念仏林古墳	古墳	古墳	円墳、木芯粘土室
50	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積横穴式石室、家形石棺
51	狐塚塚古墳	古墳	古墳	円墳又は前方後円墳
52	矢田俗塚古墳群	古墳	古墳	円墳 14、前方後円墳 3、不明 1、木芯粘土室
53	百人塚古墳	古墳	古墳	円墳
54	矢田野古墳群	古墳	古墳	円墳 3、前方後円墳 1
55	矢田野エジリ古墳	古墳	古墳	前方後円墳
56	前輪塚古墳	古墳	古墳	前方後円墳
57	投津石山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積横穴式石室
58	中村古墳	古墳	古墳	円墳、切石積横穴式石室
59	矢田野神社前遺跡	散布地	古代（平安）	
60	下粟津 A 横穴群	横穴墓	不詳	横穴 7 ～ 8
61	鳥経塚	経塚	不詳	

No	名称	種別	時代	備考
62	下栗津Ｂ横穴群	横穴墓	不詳	横穴２
63	鳥遺跡	集落跡	弥生～中世	
64	鳥Ｂ遺跡	散布地	古代	
65	鳥Ｃ遺跡	散布地	古墳	方墳？
66	狩津Ａ遺跡	散布地	縄文	
67	狩津Ｂ遺跡	散布地	縄文	
68	狩津Ｃ遺跡	集落跡	古墳	
69	矢崎宮の下遺跡	集落跡	縄文～中世	
70	東神遺跡	集落跡	古墳～古代	
71	串カンノヤマＡ遺跡	散布地	古代（奈良）	
72	串カンノヤマＢ遺跡	散布地	古墳	
73	串カンノヤマＣ遺跡	散布地	古墳	
74	今江向ノ山遺跡	散布地	弥生	
75	狐山遺跡	集落跡	古墳	
76	土百遺跡	散布地	縄文	
77	今江五丁目遺跡	集落跡	縄文・古墳	
78	五郎池目塚	目塚	縄文	
79	矢崎Ｂ古墳	古墳	古墳	
80	狐山古墳	古墳	古墳	
81	土百古墳	古墳	古墳	
82	御幸塚古墳	古墳	古墳	前方後円墳、小松市指定史跡
83	今江横穴群	横穴墓	不詳	横穴４
84	御幸塚城跡	城館跡	中世	土塁と曲輪の一部
85	串古窯跡	生産遺跡	中世末	製陶
86	日末瓦窯跡	生産遺跡	近世前期	横瓦窯
87	大領遺跡	集落跡	古代～中世	古代北陸道
88	浅井畷古戦場	その他の墓	中世末	県指定史跡
89	林超勝寺跡	社寺跡	不詳	
90	林遺跡（林タカヤマ古窯跡群）	生産遺跡	古墳	須恵器窯３、南加賀古窯跡北部
	林遺跡（林オオカミダニ古窯跡群）	生産遺跡	古墳	須恵器窯２、土師器灯１、南加賀古窯跡北部
	林遺跡（林製鉄跡）	生産遺跡	古代	製鉄炉２、製炭窯４、鍛冶炉２、鉄滓出土
91	戸津５・12号窯跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯２、南加賀古窯跡北部
	戸津シンブオワリ製鉄跡	生産遺跡	古代（平安）	製鉄炉４、製炭窯３
92	戸津古窯跡群	生産遺跡	古代、中世（鎌倉）	須恵器窯36（瓦陶兼窯５）、土師器灯19、製炭窯２、加賀窯１、南加賀古窯跡北部
93	戸津ハテヶ丘古窯跡群	生産遺跡	古墳	須恵器窯７、製炭窯１、南加賀古窯跡北部
94	戸津１号窯跡	生産遺跡	古代（平安）	製炭窯
	戸津ウタダニ遺跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉１、製炭窯１
95	戸津ショウダダニ遺跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯１、製鉄炉１、南加賀古窯跡北部
96	戸津２号窯跡	生産遺跡	不詳	製炭窯
	戸津アナヤマ古窯跡	生産遺跡	不詳	製炭窯
97	戸津オオタニ遺跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯２、製鉄炉１、南加賀古窯跡北部
98	二ツ梨一貫山古窯跡群	生産遺跡	古代	須恵器窯12、土師器灯28、製鉄炉１、製炭窯２、南加賀古窯跡北部
99	二ツ梨Ⅱ岡山古窯跡群	生産遺跡	古墳・古代	須恵器窯４
100	二ツ梨Ⅱ岡山古窯跡群	生産遺跡	古墳～古代	須恵器窯12（埴陶兼窯２、瓦陶兼窯２）、南加賀古窯跡北部
101	二ツ梨焔硝池古窯跡群	生産遺跡	古墳・古代（平安）	須恵器窯（埴陶器兼窯）３、土師器灯３、南加賀古窯跡北部
102	二ツ梨ダミノキバラ古窯跡群	生産遺跡	古代	土師器灯４、須恵器窯、南加賀古窯跡北部
103	二ツ梨丸山古窯跡群	生産遺跡	古墳	須恵器窯３、南加賀古窯跡北部
104	二ツ梨向山古窯跡群	生産遺跡	古墳	須恵器窯８、南加賀古窯跡北部
105	二ツ梨東山古窯跡群	生産遺跡	古墳	須恵器窯５、南加賀古窯跡北部
106	二ツ梨釜遺跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯１、製鉄１、製炭窯１、南加賀古窯跡北部
107	二ツ梨横川遺跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯１、製鉄１、南加賀古窯跡北部
108	二ツ梨奥谷古窯跡群	生産遺跡	古代（平安末）	須恵器窯２、加賀窯１、南加賀古窯跡北部
109	二ツ梨奥谷１～２号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄２
110	二ツ梨釜谷古窯跡群	生産遺跡	古代	須恵器窯６（瓦陶兼窯１）、南加賀古窯跡北部
111	二ツ梨カセイデ古窯跡群	生産遺跡	不詳	須恵器窯２、南加賀古窯跡北部
112	矢田野向山古窯跡群	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯６、南加賀古窯跡北部
113	矢田野長尾山遺跡	生産遺跡	古代（奈良）・中世（鎌倉）	須恵器窯４、加賀窯２、製鉄３、南加賀古窯跡北部
114	箱宮ドウガヤチ古窯跡群	生産遺跡	古代（奈良）・中世（鎌倉）	須恵器窯６、加賀窯２、南加賀古窯跡北部
115	箱宮Ａ遺跡	散布地	中世	
116	箱宮Ｂ遺跡	散布地	中世	
117	小大王谷１～２号窯跡	生産遺跡	中世（鎌倉）	加賀窯２
118	小大王谷１号製鉄跡（天王山１号製鉄跡）	生産遺跡	不詳	製鉄炉
119	小大王谷２～３号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄２
120	大久保谷１～２号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄２
121	大久保谷古窯跡	生産遺跡	不詳	
122	那谷１号窯跡	生産遺跡	中世（鎌倉）	加賀窯
123	矢田野カナクソダニ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄３
124	矢田野１～２号横穴	横穴墓	不詳	
125	那谷１～５号横穴	横穴墓	不詳	
126	那谷６号横穴	横穴墓	不詳	
127	那谷中山谷製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉３
128	土荒屋ユルイデン製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉２
129	土荒屋ジャモンダニ遺跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯４、製鉄３、南加賀古窯跡北部

No	名称	種別	時代	備考
130	上荒屋サンマイダニ遺跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯４～５、製鉄２、横穴１、地下式坑１、南加賀古窯跡北部
131	上荒屋サンマイダニヤマ古窯跡群	生産遺跡	古墳・古代（奈良）	須恵器窯４、南加賀古窯跡北部
132	上荒屋キダシ古窯跡群	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯２、南加賀古窯跡北部
133	上荒屋トリダニ古窯跡群	生産遺跡	古代（奈良）・中世（鎌倉）	須恵器窯１、加賀窯１、製鉄炉１、南加賀古窯跡北部
134	上荒屋オジヤマ古窯跡群	生産遺跡	中世（鎌倉）	加賀窯４、製鉄炉１
135	戸津１～２号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉２
136	戸津本蓮寺跡	社寺跡	中世（室町）	
137	戸津八幡神社前遺跡	散布地	古代～中世	
138	上荒屋都谷口遺跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉１
139	荒場ニカヤマ遺跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯１、製鉄炉１、南加賀古窯跡北部
140	荒場タニヤマ遺跡	生産遺跡	古代（奈良）	製鉄炉１
141	上荒屋カウジョウヤマ遺跡	生産遺跡、社寺跡、墳墓	古代（平安）～中世	須恵器窯５、製鉄炉２、墳墓、南加賀古窯跡北部
142	上荒屋ハカンタニ古窯跡群	生産遺跡	中世（鎌倉）	加賀窯２
143	湯上谷古窯跡群	生産遺跡	中世（鎌倉）	加賀窯10、製鉄炉２
144	西座フルヤシキ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄
145	西座ムカイヤマカナクソ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄２
146	牧口ホドラ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄２
147	牧口中田墳跡	墳墓	中世（鎌倉）	牧郷屋比定地
148	白山山ドヤマ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉複数
149	月口神社製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄
150	月口エンドウ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄
151	月口遺跡	散布地	不詳	
152	林八幡神社経塚	経塚	中世（鎌倉）	
153	林館跡	城館跡	中世	
154	津波倉神社遺跡	散布地	中世	
155	津波倉ホットジ遺跡	横穴墓	中世（室町末）	地下式坑６、２基調査
156	大谷山貝塚	貝塚	縄文	
157	小山田コガダニ遺跡	散布地	不詳	鉱滓散布地
158	小山田スギトギ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉２
159	小山田オウサダニ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉２
160	津波倉ハクマイダニ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉１、製炭窯複数
161	木場古墳群	古墳	古墳	円墳４
162	木場古墳	古墳	古墳	地元で池田城跡とされる
163	池田城跡	城館跡	不詳	
164	木場温泉遺跡	散布地	縄文	
165	木場Ａ遺跡（木場遺跡Ⅱ地区）	生産遺跡	古代（奈良）	製鉄炉１、製炭窯２
166	木場Ｂ遺跡	散布地	古代（平安）～中世	
167	木場Ｃ遺跡	散布地	弥生	
168	木場遺跡Ａ地区（１号遺跡）	生産遺跡	古代（平安）	製炭窯３、鉱滓散布地
169	木場遺跡Ｂ地区（２号遺跡）	生産遺跡	古代（平安）	製鉄炉２、製炭窯２
170	木場遺跡Ｃ地区（３号遺跡）	生産遺跡	不詳	製鉄
171	木場遺跡Ｄ地区（４号遺跡）	生産遺跡	不詳	製鉄炉１、製炭窯１
172	木場遺跡Ｅ地区（５号遺跡）	生産遺跡	不詳	製鉄
173	木場遺跡Ｆ地区（６号遺跡）	生産遺跡	不詳	製鉄
174	木場遺跡Ｇ地区（７号遺跡）	生産遺跡	不詳	製鉄炉
175	木場遺跡Ｄ地区（８号遺跡）	横穴墓	不詳	横穴１
176	大山遺跡	散布地	不詳	鉱滓散布地
177	長谷隅油屋の山遺跡	散布地	不詳	鉱滓散布地
178	三谷遺跡	散布地	縄文	
179	三谷Ｂ遺跡	散布地	弥生～古墳	
180	三谷トガ谷遺跡	不詳	不詳	墳丘又は塚
181	三谷大谷遺跡	集落跡	古代～中世	
182	三谷大谷製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉１、鉱滓散布地
183	遊行寺城跡	城館跡	不詳	小規模な砦跡か
184	遊代寺ムコンヤマ製鉄跡	生産遺跡	中世（鎌倉）	製鉄炉１、製炭窯１
185	遊代寺ガッショウクン遺跡	生産遺跡	古墳	製炭窯３、鉱滓散布地
186	遊代寺Ａ遺跡	散布地	不詳	鉱滓散布地
187	本江古窯跡	生産遺跡	近世	製陶
188	遊代寺跡	生産遺跡	近世末	再興九谷「遊代寺窯」
189	遊代寺丸窯跡	生産遺跡	近世前期	横丸窯
190	遊行寺跡	社寺跡	中世	岩川氏菩提寺「遊行寺」比定地
191	安宅関跡	その他	不詳	想像定史跡
192	安宅住吉神社遺跡	散布地	不詳	
193	安宅中世墓群	その他の墓	中世（室町）	
194	安宅大塚古墳	不詳	不詳	積石塚とも墳丘の首石とも、現存せず
195	**小松城跡**	**城館跡**	**近世**	**本丸・二ノ丸・三の丸の一部、本丸櫓台は小松市指定史跡**
196-1	大川遺跡	町屋跡	近世	近世小松城下町・新町の町屋跡
196-2	東町遺跡	町屋跡	近世	近世小松城下町・東町の町屋跡
197	寺町遺跡	生産遺跡	中世（室町）	鍛冶
198	多太神社境内遺跡	散布地	中世（室町）	理納銭出土地
199	**本折城跡**	**城館跡**	**中世（室町）**	**本折氏居館伝承地**
200	八日市地方遺跡	散布地	縄文・中世	
		集落跡	弥生	環壕集落
201	上小松遺跡	散布地	古代（平安）	
202	園町遺跡	集落跡	弥生	
203	梯川鉄橋遺跡	散布地	弥生	
204	梯川鉄橋Ｂ遺跡	散布地	弥生	

No	名称	種別	時代	備考
205	島田 A 遺跡	散布地	古墳～古代	
206	島田 B 遺跡	散布地	古墳	
207	御館遺跡	城館跡	中世（室町）	
208	鐘撞遺跡	散布地	弥生～古代	
		集落跡	中世	一向一揆・蜷川新七郎重親居館伝承地
209	種遺跡	散布地	弥生～古代	
		集落跡	中世	
210	松梨遺跡	散布地	縄文～弥生・中世	
		集落跡	古墳～古代	
211	長田遺跡	散布地	弥生～古墳	
212	長田南遺跡	散布地	弥生・古代（平安）	
		集落跡	中世（室町）	
213	中ノ江遺跡	散布地	古墳	
214	高堂遺跡	集落跡	弥生～中世	
215	野田フルヤシキ遺跡	集落跡	中世	
216	小長野遺跡	散布地	不詳	
217	小長野 B 遺跡	散布地	弥生	
218	小長野 C 遺跡	集落跡	古代	
219	大長野 A 遺跡	集落跡	弥生～中世	
220	大長野 B 遺跡	散布地	不詳	
221	牛島宮の島遺跡	集落跡	古代（平安）	
222	千代デジロ遺跡	集落跡	弥生～中世	
223	牛島ウハシ遺跡	集落跡	縄文～中世	
224	平面輪川遺跡	集落跡	弥生	
225	平面輪川 B 遺跡	散布地	弥生	
226	白江輪川遺跡	集落跡	弥生・中世	
227	白江塁跡	城館跡	中世（室町）	白江新助景盛居館伝承
228	白江遺跡	散布地	古墳～中世	漆町遺跡の一部
229	漆町遺跡	集落跡	弥生～中世	
230	一針遺跡	散布地	縄文	
231	一針 B 遺跡	集落跡	弥生～古墳	
232	一針 C 遺跡	集落跡	弥生～古墳	
233	定地坊跡	社寺跡	中世（室町）	
234	千代・能美遺跡	集落跡	古墳～中世	
235	千代オオキダ遺跡	散布地	縄文～弥生	
		集落跡	弥生～中世	
		古墳	古墳	方墳 6
236	千代小野町遺跡	散布地	古墳	
237	千代城跡	城館跡	中世（室町）	
238	千代木村遺跡	散布地	古墳	
239	横地遺跡	散布地	縄文	
240	佐々木遺跡	集落跡	古代	財氏居宅跡（奈良）
241	佐々木ノデウラ遺跡	集落跡	弥生～中世	
242	佐々木アサバタケ遺跡	集落跡	弥生～中世	
243	佐々木アサバタケ B 遺跡	集落跡	奈良・平安	
244	打越遺跡	散布地	古代	
245	若杉窯跡	生産遺跡	近世末	再興九谷「若杉窯」、連房式登窯
246	吉竹遺跡	集落跡	弥生～中世	
247	吉竹 B 遺跡（吉竹遺跡 19 地区）	散布地	古墳	旧河道の御跡
248	吉竹 C 遺跡	集落跡	弥生～中世	
249	千木野遺跡	散布地	縄文	
	千木野 (A) 遺跡	古墳	古墳	方墳 8
	千木野 (B) 遺跡	集落跡	古墳	
250	幡生 1 号墳	古墳	古墳	所在不詳、現存するのは現代残土の山
251	釜谷古墳・釜谷 2 号墳	古墳	古墳	切石積横穴式石室
252	若杉オソボ山 1 号窯跡	生産遺跡	古墳	須恵器窯
253	浄水寺跡	社寺跡	古代～中世	創建は加賀国府・国分寺周辺山林寺院群の一
254	八幡遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	弥生～古墳・古代（奈良）・中世（鎌倉）	
		その他の墓	古代（平安）	土坑墓
	八幡古墳群	古墳	古墳	円墳 8、木芯粘土槨
	八幡若杉窯跡	生産遺跡	近世末	再興九谷「八幡若杉窯」、八幡 6 号墳を削平して築いた連房式登窯
255	荒木田遺跡	集落跡	古墳～中世	
256	軽海西芳寺遺跡	集落跡	縄文～中世	
257	大谷口遺跡	散布地	弥生	
258	軽海遺跡	散布地	弥生～中世	
259	亀山遺跡	生産遺跡	古墳	玉作
260	軽海中世墓群	その他の墓	中世（室町）	集石墓 9
261	軽海座寺	社寺跡	古代（平安）	大興寺伝承地
262	西芳寺遺跡	社寺跡	古代（平安）	西芳寺伝承地
263	**古府しのまち遺跡**	**集落跡**	**弥生～中世**	
264	古府遺跡	集落跡	古代（平安）	
265	古府フドンド遺跡	散布地	古代（平安）	
266	十九堂山遺跡	社寺跡	古代（平安）	加賀国分寺推定地
267	十九堂山中世墓群	その他の墓	中世（室町）	
268	古府横穴	不詳	不詳	
269	古府シマ遺跡	散布地	古代（平安）～中世	

No	名称	種別	時代	備考
270	南野台遺跡	散布地	縄文	
271	小野遺跡	集落跡	古代（平安）	加賀国府推定地の一隅
272	小野スギノキ遺跡	集落跡	古代（平安）	加賀国府推定地の一隅
273	小野窯跡	生産遺跡	近世末	再興九谷「小野窯」
274	前田利常公灰塚	その他の墓	近世	前田利常公が荼毘に付された地とされる
275	埴田の虫塚	その他	近世末	害虫の菩提供養と駆除方法を記した石柱、小松市指定史跡
276	埴田ミヤケノ遺跡	散布地	不詳	
277	埴田ミヤンタン遺跡	散布地	不詳	
278	埴田ウラムキ遺跡	散布地	古代～中世	
279	埴田フルカワ遺跡	散布地	古墳	
280	宮谷寺屋敷遺跡	散布地	縄文・中世（室町）	
281	埴田遺跡	散布地	古代	
282	埴田塚	不詳	不詳	
283	埴田後山古墳群	古墳	古墳	円墳 9、木棺直葬、木芯粘土室
284	埴田山古墳群	古墳	古墳	円墳 12、方墳 4
285	御菩提所古墳	古墳	古墳	円墳
286	河田山遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		集落跡	弥生	高地性集落、河田山 10 ～ 12 号墳が重複
		その他の墓	古代（奈良）	火葬墓、河田山 1 号墳の西側に所在
287	河田山古墳群	古墳	古墳	前方後円墳 2、前方後方墳 2、円墳 22、方墳 34、不明 1、木棺直葬、木芯粘土室、切石積横穴式石室
	河田横穴	横穴墓	不詳	地下式坑、河田山 54 号墳の南に開口
288	河田山 1 号窯跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯、能美古窯跡南群　八里・河田山支群、河田山 60 号墳の北西斜面に所在
	河田山古窯跡	生産遺跡	不詳	須恵器窯、能美古窯跡南群　八里・河田山支群
289	河田 B 遺跡	散布地	縄文・古代（奈良）	
290	河田 C 遺跡	散布地	不詳	
291	下八里横穴群	横穴墓	不詳	地下式坑 6、横穴 1、不明 1、3 地点で計 8 基
292	穴場横穴群	横穴墓	不詳	横穴 2 基
293	上八里横穴群	横穴墓	中世（室町）	横穴 11 基
294	上八里中世墓跡	その他の墓	中世（室町）	
295	上八里 A 遺跡	散布地	縄文・古代（平安）	
296	上八里 B 遺跡	散布地	古代（奈良）	
297	上八里 C 遺跡	横穴墓	古墳	横穴 2 基
298	上八里 D 遺跡	散布地	古代（奈良）	
299	上八里 1 号窯跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯、能美古窯跡南群　八里・河田山支群
300	上八里 2 号窯跡	生産遺跡	不詳	地下式窖窯、能美古窯跡南群　八里・河田山支群
301	谷内横穴	不詳	不詳	
302	河田館遺跡	散布地	縄文・中世	
303	下出地割遺跡	散布地	不詳	
304	佐野 A 遺跡	散布地	弥生	
305	佐野 B 遺跡	散布地	古墳	
306	佐野八反田遺跡	散布地	古代	
307	挟野神社前遺跡	散布地	古代（平安）	
308	河田向山下遺跡	散布地	縄文・古代（平安）	
309	河田向山古墳群	古墳	古墳	円墳 7
310	八里向山 A 遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	弥生	高地性集落
311	八里向山 B 遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		社寺跡	古代（奈良）	加賀国府・国分寺周辺山林寺院群の一
312	八里向山 C 遺跡	散布地	旧石器～縄文・古代（奈良）	
		集落跡	弥生	
		古墳	古墳	前方後方墳 1、木棺直葬
313	八里向山 D 遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		集落跡	弥生～古墳	
		古墳	古墳	方墳 2、木棺直葬
314	八里向山 E 遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		古墳	古墳	方墳 1
		集落跡	古代	
315	八里向山 F 遺跡	散布地	縄文	
		古墳	古墳	円墳 10、木棺直葬
		その他の墓・横穴墓	中世（室町）	集石墓 1、横穴 3
316	八里向山 G 遺跡	散布地	弥生・古代（平安）	
317	八里向山 H 遺跡	その他の墓	中世（鎌倉）	集石墓群、96 基調査
318	八里向山 I 遺跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯、能美古窯跡南群　八里・泉台支群
319	八里向山 J 遺跡	生産遺跡	古墳	須恵器窯、能美古窯跡南群　八里・泉台支群
320	里川 A 遺跡	生産遺跡	不詳	製炭窯 2、製炭坑約 20
321	里川 B 遺跡	生産遺跡	不詳	製炭窯
322	里川 C 遺跡	生産遺跡	不詳	製炭窯
323	里川 D 遺跡	散布地	縄文	
324	里川 E 遺跡	社寺跡	古代（平安）	加賀国府・国分寺周辺山林寺院群の一
325	里川 F 遺跡	社寺跡	古代（平安）	加賀国府・国分寺周辺山林寺院群の一
326	里川 G 遺跡	散布地	不詳	
327	遊泉寺・クボタ A 遺跡	散布地	古代（平安）～中世	
328	遊泉寺・クボタ B 遺跡	散布地	古代（平安）～中世	社寺（隆明寺）又は城館伝承地
	立明寺古窯跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯（瓦陶兼窯）
329	立明寺古墳	古墳	古墳	古代墳墓の可能性も
	隆明寺跡	社寺跡	古代（平安）	中宮八院、複数ある伝承地の一
330	遊泉寺遺跡	散布地	縄文	

No	名称	種別	時代	備考
331	宮の奥経塚	経塚	平安～鎌倉	塚５基
332	浦泉寺跡	社寺跡	古代（平安）	中宮八院、複数ある伝承地の一
333	常徳寺跡	社寺跡	中世（室町）	一向一投・宇川常徳の居宅跡とも
334	鶴川堡跡	城館跡	不詳	一向一投・宇川常徳の詰城伝承地
335	鶴川横穴	不詳	不詳	地下式坑？
336	仏大寺仏陀寺跡	社寺跡	中世	
337	仏大寺とうの池古墳	古墳	古墳	
338	仏生寺跡	社寺跡	中世	
339	仏生寺塚	経塚	中世	
340	ブッショウジヤマ古墳群	古墳	古墳	円墳２、木芯粘土室
341	中海B遺跡	集落跡	古墳～中世	
	（伝）長寛寺跡	社寺跡	古代（平安）	中宮八院、地名伝承のみ
342	中海C遺跡	散布地	古代（平安）～中世	
343	中海遺跡・岩渕遺跡	散布地	縄文	
	岩渕上野遺跡	散布地	旧石器	
344	長寛寺中世墓跡	その他の墓	中世	
345	赤穂谷口遺跡	散布地	縄文	
346	松の木谷横穴群	不詳	不詳	存在自体が不明、５基開口とされる
347	赤穂谷スギノキ谷横穴群	横穴墓	不詳	横穴９、地下式坑４
348	善興寺跡	社寺跡	古代（平安）	中宮八院
349	岩渕城跡	城館跡	中世	
350	小山城跡	城館跡	中世	
351	仏ヶ原城跡	城館跡	中世	
352	仏御前屋敷跡・仏御前墓	その他の墓	古代（平安）	小松市指定史跡
353	麦口遺跡	散布地	縄文	
354	麦口中世墓跡	その他の墓	中世	
355	下麦口横穴群	横穴墓	不詳	横穴３
356	岩倉城跡	城館跡	中世（室町）	
357	中ノ峠北城跡	城館跡	中世	
358	慶山城跡	城館跡	中世	
359	椎の木山遺跡	散布地	縄文	
360	昌隆寺跡	社寺跡	不詳	中宮八院
361	薄国寺跡	社寺跡	古代（平安）	中宮八院
362	松谷廃寺	社寺跡	古代（奈良）	８世紀前半に遡る古代山林寺院
	松谷寺跡	社寺跡	不詳	中宮八院
363	平野堡跡	城館跡	中世（室町）	一向一投・平野某詰城伝承地
364	江指城跡（山神山砦跡）	城館跡	中世（室町）	
365	藤花寺跡	社寺跡	不詳	中宮八院
366	波佐谷遺跡	散布地	中世（室町）	
367	波佐谷城跡	城館跡	中世（室町）	一向一投・宇津呂丹波守詰城伝承地
	（伝）波佐谷松岡寺跡	社寺跡	中世（室町）	
368	波佐谷横穴群	横穴墓	不詳	横穴13、地下式坑５
369	八幡遺跡	集落跡	縄文	
370	麻畠尾谷遺跡	散布地	縄文	
371	松岡寺跡	社寺跡	中世（室町）	
372	火灯山横穴群	横穴墓	不詳	横穴３
373	こたい谷横穴	横穴墓	不詳	横穴１
374	穴山横穴	横穴墓	不詳	横穴１
375	池城経塚	経塚	中世（室町）	
376	豊山横穴	横穴墓	不詳	横穴１
377	布橋遺跡	散布地	縄文	
378	寺ノ腰遺跡	散布地	縄文	ほかに寺院跡の伝承あり
379	観音下城跡	城館跡	不詳	
380	観音下白山神社遺跡	横穴墓	中世	
381	和気後山谷奥遺跡	生産遺跡	古代（平安）	土師器焼成坑、能美古窯跡南群　後山谷支群
382	和気後山谷２号窯跡	生産遺跡	古代（奈良末～平安）	須恵器窯、能美古窯跡南群　後山谷支群
383	和気下和気古窯跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯、能美古窯跡南群
384	和気近世窯跡	生産遺跡	近世	
385	和気矢口A遺跡	散布地	縄文	
386	和気公文屋遺跡	城館跡	不詳	
387	和気中和気古窯跡	生産遺跡	不詳	須恵器窯、能美古窯跡南群　後山谷支群
388	虚空蔵城跡	城館跡	中世	
389	虚空蔵山横穴群	横穴墓	不詳	
390	寺畠古窯跡	生産遺跡	不詳	須恵器窯、能美古窯跡南群
391	寺畠薬師坂古墳	古墳	古墳	
392	鍋谷社跡	社寺跡	不詳	
393	鍋谷中世墓群	その他の墓	中世	
394	鍋谷横穴	横穴墓	不詳	
395	鍋谷堡跡	城館跡	不詳	

第Ⅱ章 古府しのまち遺跡発掘調査

第１節　調査に到る経緯

小松市古府町地内で計画された住宅新築工事に伴い、平成 28 年８月 13 日付けで國本季史氏より埋蔵文化財の取り扱いについての協議書が提出された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地（古府しのまち遺跡）に含まれていたため、埋蔵文化財センターは同日付けで試掘調査が必要との旨を回答し、９月 23 日に試掘調査を実施。対象地に設定した３か所のうち、北側の試掘坑１か所を除き、埋蔵文化財が確認された。よって、工事実施にあたっては、事前に発掘調査を実施するなど、埋蔵文化財に対する適切な保護措置が必要との旨を９月 23 日付けで通知した。

住宅新築工事の計画では、擁壁工事のみ、基礎が埋蔵文化財遺構確認面まで達することから、埋蔵文化財の現状保存は不可能と判断され、当初、その範囲 134㎡を発掘調査対象としている。11 月 21 日付けで事業主からの発掘調査依頼の提出、同日付けで発掘調査に関する協定書の締結があり、11 月 28 日に発掘調査の実施に至った。その後、発掘調査対象とした 134㎡の内、進入箇所にあたる南側９㎡は、削平を伴う工事ではなく盛土工事へと計画変更する連絡を受けたため、発掘調査ではなく工事立会へと変更し、実質的には発掘調査は 125㎡のみを対象とした。

なお、当調査の原因が個人住宅の建設であったため、国庫補助事業として発掘調査を実施した。

第２節　調査の経過

１　調査方法

調査区全体を対象とし、国土座標に基づき 5m スパンのグリッドを設定した。擁壁工事の範囲に合わせて、重機による表土除去を行い、人力掘削による包含層掘削、遺構精査、遺構掘削作業を実施した。その他の遺構は、半裁またはアゼを設け土層確認した。遺構図面は、平面図・断面図を 1/20 または 1/10 で作成し、全体遺構図は 1/40 でフィールドステーションを利用して作成している。随時必要に応じて、モノクロのネガ及びリバーサルのポジフィルムとデジタルカメラを用いて写真記録を撮った。

なお、調査区は南北に長いコに字の形状をしていることから、調査区の東側、北側、西側と区分して、遺構検出面に至るまでは、遺物の取り上げを行っている。

２　発掘作業の経過

平成 28 年 11 月 28 日　発掘調査開始。重機による表土除去。作業員による調査区東側より遺構精査
11 月 29 日　基準点測量・水準測量およびグリッド設定。
11 月 30 日　作業員による東側より遺構検出作業、ピット半裁作業の開始。
12 月　２日　調査区東側調査完了。北側遺構掘削作業。
12 月　３日　調査区北側、西側遺構検出作業及び掘削作業。
12 月　４日　SK04 完掘。全体平面図作成。
12 月　５日　124㎡を対象に全景写真撮影、発掘調査終了。
平成 29 年　１月　９日　進入箇所にあたる南側部分の工事立会を実施。遺構に影響がないことを確認して、すべての現地対応調査終了。

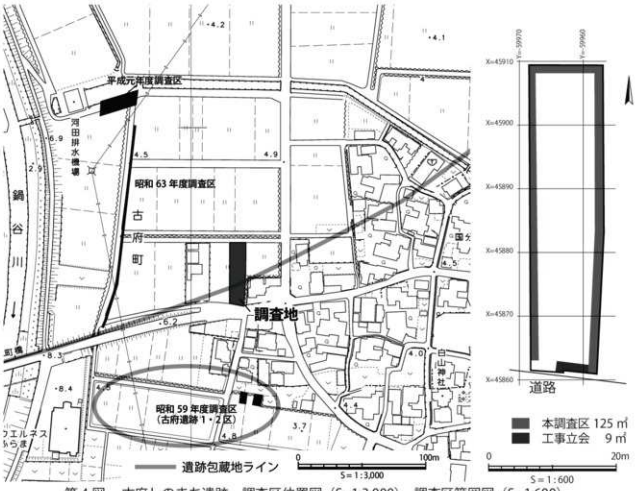
3　出土品整理等

出土品整理は令和２年度に実施した。出土品の洗浄・注記作業を整理作業員により行い、分類・接合作業、実測作業、トレース作業を整理作業員・調査員で実施した。

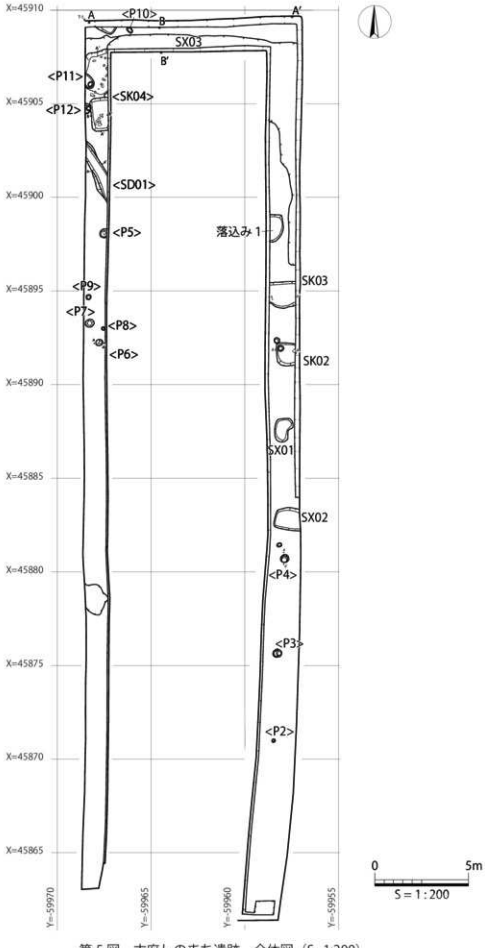
第３節　遺跡の概要と既往の調査

古府しのまち遺跡は、古府町集落の北西に広がる遺跡であり、西側は鍋谷川、南には梯川が展開する標高 4mをきる低地部分に所在する。現在でも遺跡範囲のほとんどに田んぼが広がっている状況である。既往の調査では、土地改良総合整備事業に伴う用水部分の調査（昭和 63 年度・市調査）や水田農業確立排水対策事業河田地区河田排水機前面の遊水地箇所の調査（平成元年度・県調査）があげられる。昭和 63 年度調査では、幅２m と狭いが、南北約 140m にわたり調査を行っており、耕地整理等でかなりの土の移動や削平を受け、遺構の遺存状態を良好ではなかったと報告されている。しかし、長大な調査区からは、北端で多量に出土資料にあたっており、南側へ進むにしたがって遺構・遺物ともに希薄になることや、南側 88m は旧河道と考えられる砂層が拡がり、遺構は確認されなかったことがわかっている。

出土遺物は、どちらの調査区からも弥生時代終末期から古墳時代初頭（月影式～古府クルビ式）の土器や、６世紀代、８世紀代がみられる。昭和 63 年度調査からは９世紀後葉～ 10 世紀前半の遺構及び資料もみられる。



第４図　古府しのまち遺跡　調査区位置図（S=1:3,000）、調査区範囲図（S=1:600）



第 5 図　古府しのまち遺跡　全体図（S=1:200）

第４節　発見された遺構と遺物

１　基本層序

調査区北側断面は農道に面していることから、現況面下で深さ 20 ～ 30㎝の農道・畔土があり、その下 10 ～ 15㎝程度の耕作土層、この直下に耕作土と灰黄褐色土（包含層）の攪拌土が認められる（第６図 調査区北側断面参照）。

なお、西側の田面と比較すると遺構検出面までは 10cm とないため、純粋な遺物包含層は認められず、攪拌された状態で遺構検出に至っている。

２　遺構と遺物

遺構の密度は高くなく、遺構の切り合いもみられなかった。主なものとしては溝（SD01）１条、土坑（SK02 ～ 04A・B）３基、ピット数基があげられる。調査区の北側及び東側上部（SX03）は大規模な攪拌を受けており、この上部から時期幅をもつ多量の遺物が出土した。

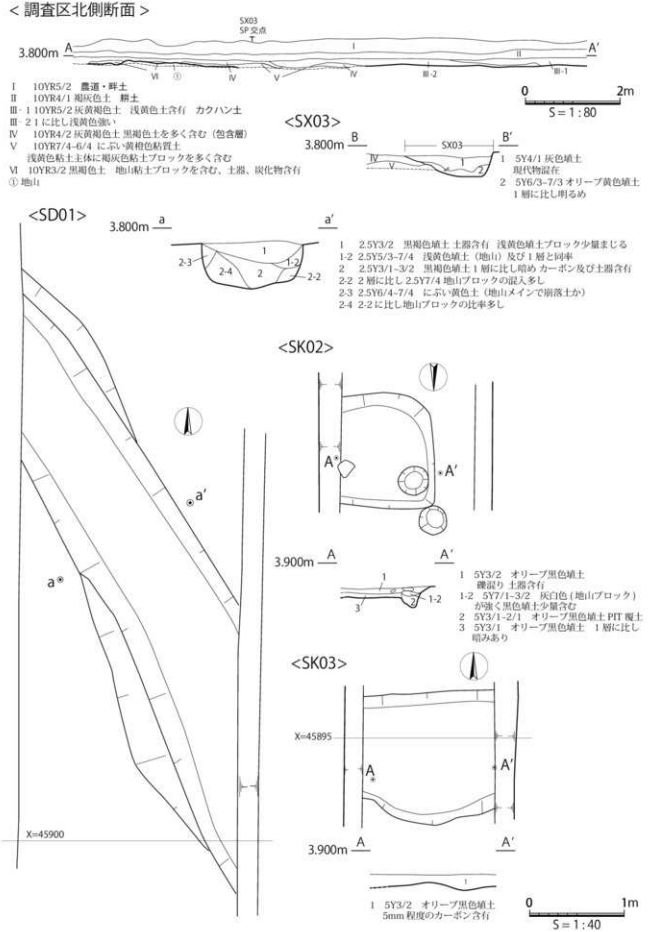
SD01

調査区の西側上半部分で検出した。北西－南東方向に傾きをもつ。幅は 1.1m、深さは残りのよいところで 25㎝程度あり、底面は平坦である。北西に向かうに従い標高地は低くなり、検出範囲内だけでも 10㎝の比高差がみられる。土層堆積状況は、西側からの地山崩壊土が多くみられる。２層より細かい土器片が出土。図化にまでは至っていない。土質や遺物から古代Ⅵ期併行かと思われる。

SK02・SK03

いずれも調査区東側で検出している。SK02 は、東側プランは調査区範囲外に延びているようで、全形状は確認できてない。深さは 15㎝程度と浅く、純粋な土坑覆土は３層が該当する。1-2 層、2 層は３層を切るピットの土層に該当する。出土土器は１層上面より、№１の出土がみられる。その他の資料としては、須恵器、土師器ともに細片の出土がみられる。SK03 は、土坑としたが、調査区内、東西に上端の立ち上がりは確認できていない。覆土は単純１層のみで、SK02 の１層と近似することから、15 世紀以降の遺構と考えられる。

調査区西側、遺構検出状況（南から）



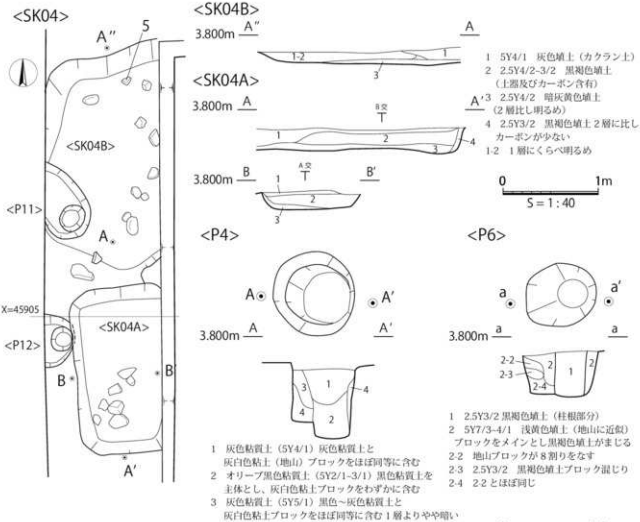
第 6 図　古府しのまち遺跡　主な遺構と断面（調査区北側断面 S=1:80、その他の遺構 S=1:40）

SX01、02、03

いずれも覆土は旧耕土である。SX01 及び SX02 は 5cm 程度と浅く、近代以降に掘削されたものと考えられる。SX03 は、調査区北側及び東側上部に広がる。出土遺物は、SX02 から№ 14、15、SX03 から№ 16 ～ 20 が出土している。いずれも周辺の混入物と考えられ、すべて古代に位置づけられる。№ 17 はほぼ略完形を呈する。時期は古代Ⅳ期併行のものと考えられる。

SK04A・B

遺構検出状況段階は、SX03（攪乱）の覆土（灰色埴土）が上面に被っていたことから、一連のものにみえていた。そこで、畔を設けて全体的に掘り下げたところ、2つの土坑に分かれることが判明した。いずれの土坑からは 6 ～ 10cm程度の礫が出土しており、中には凝灰岩質で被熱したものもみられる。この 2 つの土坑は、土層断面からは明確な切り合いを伴わないため、判断できなかった。形状は、A が不定形なのに対し B は方形状を呈している。出土遺物は SK04A からは、須恵器坏蓋つまみ部分№ 4、SK04B からは瓶の底部№ 5 や砥石（№ 7）が見つかっている。№ 4 は形状から古代Ⅲ～Ⅳ期併行と考えられる。№ 7 の砥石は、側面及び平面に使用痕がみられ、平面には部分的に金属痕跡がみられる。



第 7 図　古府しのまち遺跡　SK04 及びピットの平面図及び断面図（SK04 S=1:40, ピット S=1:20）

P2

調査区東側の南、X=45865、Y=-59969 に位置する。小型で建物の柱跡というよりは、杭穴か。出土遺物は、くの字口縁甕の口縁片 1 点のみ出土している。

P3

調査区東側、X=45875、Y=-59968 に位置する。掘立柱建物跡の柱穴と考えられる。
出土遺物は土師器及び須恵器の細片が出土している。

P4

調査区東側の南、X=45880、Y=-59958 に位置する。掘立柱建物跡の柱穴と考えられる。
土層は、柱痕及び掘り方と明瞭に区分可能で、遺物は、柱痕上面で№ 9、10 が、掘り方より№ 8 の須恵器壺か坏の口縁片が出土している。№ 9 は、土師器皿で、口縁部分は欠損するものの、底部は全周し、回転糸切り痕が確認できる。№ 10 は皿 B である。底部片と胴部片は未接合であるが、胎土や色調等から同一個体と判断し、図化復元している。いずれも古代Ⅵ 3 期併行と考えられる。

P5

調査区西側の北部分、X=45898、Y=-59967 に位置する。掘立柱建物跡の柱穴と考えられる。柱痕部分の土質は、オリーブ黒色埴土である。遺物は、№ 11 と土師器細片が出土している。№ 11 は、黒色埦で、口縁片と胴部片は未接合であるが、胎土や色調等から同一個体と判断し、図化復元している。表面摩耗が激しいが、内面はミガキ調整が施されていることがわかる。時期は古代Ⅵ期併行か。

P6

調査区西側の北部分、X=45893、Y=-59967 に位置する。掘立柱建物跡の柱穴と考えられる。土層は、柱痕及び掘り方と明瞭に区分可能で、柱痕上面で№ 12、13 及び土師器の細片が出土している。№ 12 は、須恵器の坏蓋片である。口縁残存率 2/36 以下と細片で、詳細な時期は不明瞭である。№ 13 は土師器埦もしくは皿の底部片である。底面には回転糸切り痕がみられる。時期は古代Ⅵ－ 2 、 3 期併行か。

P7

調査区西側の北部分、X=45893、Y=-59967 に位置する。掘立柱建物跡の柱穴と考えられる。土層は 2.5Y4/1 黄灰色埴土で、P4 や P6 とは土質が異なる。出土遺物は土師器細片が出土している。

P8

調査区西側の北部分、X=45893、Y=-59967 に位置する。掘り方を伴わない杭穴と思われれる。土層は P4 や P6 と同様である。出土遺物は土師器細片が出土している。

P9

調査区西側の北部分、X=45895、Y=-59967 に位置する。掘り方を伴わない杭穴と思われれる。土層は P4 や P6 と同様である。出土遺物は土師器細片が出土している。

P10

調査区北側の西部分、X=45909、Y=-59967 に位置する。掘立柱建物跡の柱穴と考えられる。土層は P7 と同様である。出土遺物は古式土師器の細片が出土している。

P11,12

P11 は SK04B 内南西部に位置する。遺物の出土はない。P12 は SK04A の西側に隣接したところに位置する。出土遺物は土師器片が出土している。

その他の遺物

その他の出土遺物は、おちこみ周辺出土は№ 21 ～ 24 がある。21 は近世陶磁器で、越前か。22

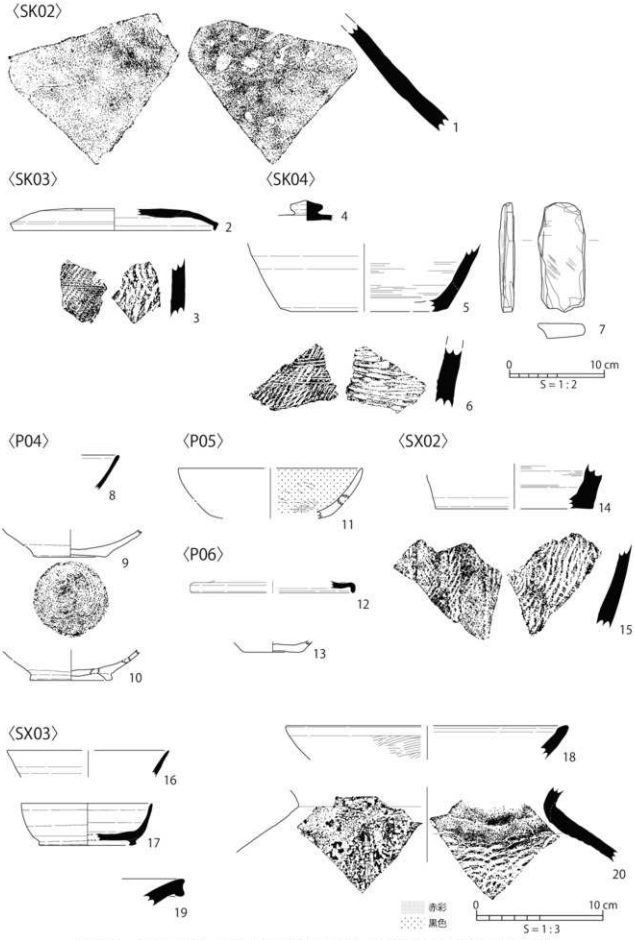
は坏蓋で口縁部分は欠ける。つまみ部の形状から古代Ⅲ期併行か。24は長頸瓶の口縁から頸部にかけてのみ残存する。調査区東側出土は№25～27がある。25は瓶の底部片で、底面には工具痕がみられる。26は甕の口縁片である。27は完形の土錘である。中世以降に位置づけられるか。北区東側は№28～47がある。図化していないものも含めて土師器埦や皿の底部が多く出土しており、時期は古代Ⅵ-2，3期併行と思われる。須恵器は坏A（29）、盤A（31）、盤B（32）、瓶D（40、41、42）、鉢（44）、瓶A（43）と破片であるが、複数の器種がみられる。時期は古代Ⅲ～Ⅳ期、もしくはⅥ期以降の二時期がみられる。46は長釜の口縁片である。47は完形の陶錘である。46、47はいずれも古代Ⅵ期併行と思われる。北区出土は№48～55、長釜口縁片（48）、鍋口縁片（49）、小型壺（54）、鉢B（50）、土師器皿（51～53）、中世のかわらけ（55）がみられる。時期は北区東側と同様で、古代Ⅲ～Ⅳ期、もしくはⅥ期以降の２時期と思われる。№56は調査区内、№57は表採資料である。いずれも古代Ⅱ-３～Ⅲ期併行か。

第５節　まとめ

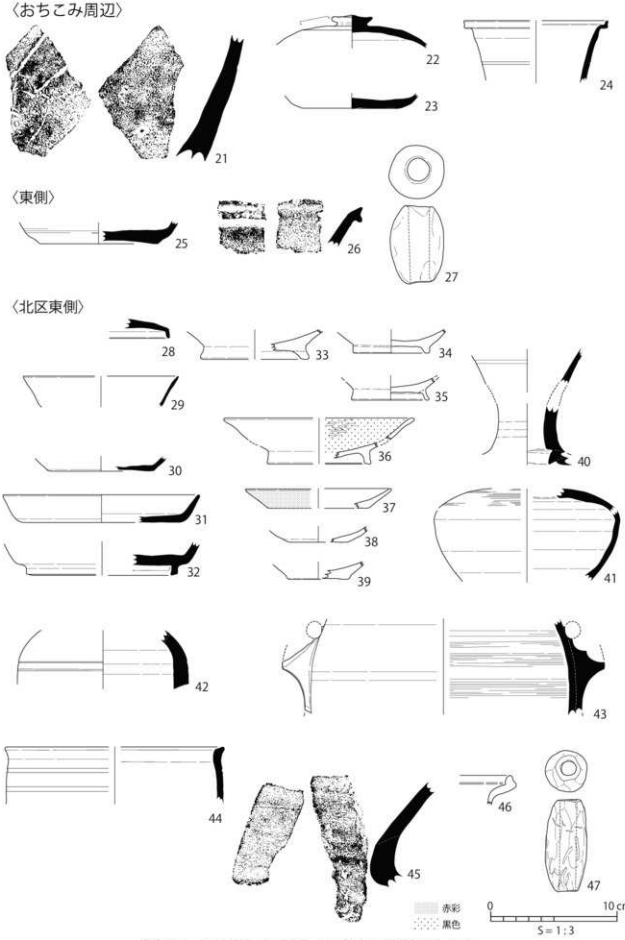
今回の調査では、耕作土直下であること、調査区北側は大きく攪拌を受けており、擁壁工事部分と小規模である中で、かろうじて建物の柱と考えられるピット数基と土坑を確認することができた。また本調査でも、昭和63年度調査と同様で遺跡の南辺であることがわかった。ピットは、土質から大きく２パターンみられ、黒色埴土を呈するものは古代Ⅵ-２、３併行である。黄灰色埴土のものは、それらより古い遺構である可能性が高く、細片や攪拌された土中から出土している土器や既往の調査事例から、古代Ⅲ～Ⅳ期併行に位置づけられるものと思われる。遺物は、遺構及び攪拌された箇所の図化には至っていないものも含めて、弥生時代終末期、８～10世紀、15世紀、近世と幅広く出土しており、梯川流域にみられる弥生時代から古代、中世にかけての複合遺跡と同様であると言えよう。

引用参考文献

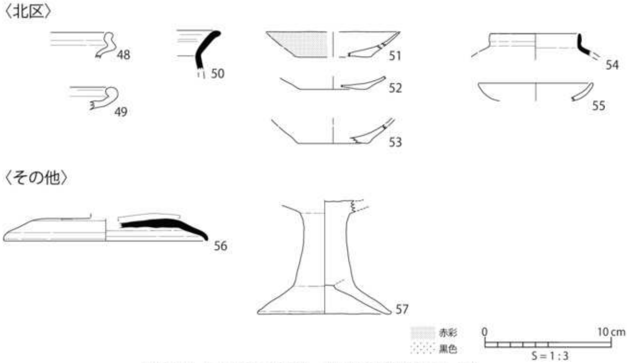
石川県立埋蔵文化財センター　1987『小松市古府遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター　1991『古府しのまち遺跡発掘調査報告』
小松市教育委員会 1995『古府しのまち遺跡』
田嶋明人 1986「9世紀後半から13世紀にかけての土師器の変遷」『漆町遺跡Ⅰ』石川県埋蔵文化財センター
田嶋明人 1998「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題（報告編）』



第 8 図　古府しのまち遺跡　出土遺物実測図 1（7 は S=1:2, 他はすべて S=1:3）



第９図　古府しのまち遺跡　出土遺物実測図２（S=1:3）



第 10 図　古府しのまち遺跡　出土遺物実測図 3（S=1:3）

第 2 表　古府しのまち遺跡　出土遺物観察表

掲載 No.	実測 No.	識別	器種名	出土地点	法量	焼成	胎土	色調	残存	時期	調整	備考
1	13	中世陶器	甕	SK02	残存高 :(11.6)	堅緻	粗粒砂 (少) 含有	7.5YR7/1 灰白色	—	15C か		胴部上半片
2	14	須恵器	坏蓋	SK03	口径 : [15.9] 器高 :(1.7)	堅緻	粗粒砂 (少) 含有	N6/ 灰色	口 :10/36	Ⅳ期か	内外面 : ロクロナデ、上面 : ヘラ削り	
3	15	須恵器	甕	SK03	器高 (5.7)	堅緻	細粒砂 (並) 含有	7.5Y6/1 灰色	—		外面 : 平行叩き、内面同心円当て具痕	
4	16	須恵器	坏蓋	SK04A	つまみ径 :2.6 器高 :(1.6)	堅緻	粗粒砂 (少) 含有	N7/ 灰白色	—	Ⅲ～Ⅳ期か	内外面 : ロクロナデ	つまみ部のみ
5	18	須恵器	瓶 A	SK04B No.2	器高 (5.4) 底径 : [13.4]	堅緻	細粒砂 (黒色粒) 含有	7.5Y7/1 灰白色	—		内外面 : ロクロナデ	内面自然釉有
6	19	須恵器	甕	SK04B 肩部	器高 (5.7)	堅緻	3mm 以上の角礫含有	N6/ 灰色	—		外面 : 平行叩き、内面平行当て具痕	
7	76	砥石		SK04B	全長 5.76 最大幅 2.49 重量 18.5g				—			石材 : 粘板岩
8	22	須恵器	埦か	P04 掘り方	器高 :(2.8)	堅緻	中粒砂 (多) 含有	N5/ 灰色	—	Ⅳ期か	内外面 : ロクロナデ	
9	20	土師器	埦 A	P04 柱痕上層	器高 :(2.3) 底径 :6.8	良好	中粒砂 (多) 含有	10YR7/4 にぶい黄橙色	底 :36/36	Ⅵ期	内外面 : ロクロナデ 底 : 回転糸切り	
10	21	土師器	皿 B	P04 柱痕上層	器高 :(2.4) 底径 :6.5	良好	中粒砂 (多) 含有	7.5Y8/2 灰白色	底 :24/36	Ⅵ期		外面赤彩、内面黒色 10C 前半
11	23	土師器	埦	P05	口径 : [14.5] 器高 : [4.0]	やや不良	粗粒砂 (中) 含有	7.5Y6/2 灰褐色	口 :1/36	Ⅳ期か	表面摩耗、内面ヘラミガキ	内面黒色
12	24	須恵器	坏蓋	P06 掘り方	器高 :(0.9)	堅緻	中粒砂 (黒色粒) 含有	N6/ 灰白色	—		内外面 : ロクロナデ	
13	25	土師器	埦か	P06 柱痕	器高 :(0.6) 底径 : [4.6]	やや不良	密	2.5Y8/1 灰白色	—	Ⅵ期か	内外面 : ロクロナデ 底 : 回転糸切り	
14	4	須恵器	瓶 A	SX02	器高 (3.4) 底径 : [12.4]	堅緻	粗粒砂 (少) 含有	N5/ 灰色	底 :5/36		内外面 : ロクロナデ、底面 : ヘラ削り	
15	5	須恵器	甕	SX02	器高 (6.7)	堅緻	中粒砂 (多) 含有	N7/ 灰白色	—		外面 : 平行叩き、内面同心円当て具痕	外面自然釉有
16	9	須恵器	坏	SX03	口径 : [12.8] 器高 :(2.1)	堅緻	密	N6/ 灰色	口 :4/36		内外面 : ロクロナデ	
17	8	須恵器	坏 B	SX03、北区東側	口径 :10.5 器高 :3.3 底径 :7.5	堅緻	中粒砂 (多) 含有	N7/ 灰白色	底 :21/36	Ⅳ期	内外面 : ロクロナデ、底面 : ヘラ削り後ナデ	高台接着部明瞭、内面使用痕有
18	10	須恵器	鉢か	SX03	口径 : [22.3] 器高 :(2.7)	堅緻	中粒砂 (多) 含有	7.5Y4/1 灰色	口 :2/36		内外面 : ロクロナデ、その後外面ハケメ調整か	外面自然釉有
19	11	須恵器	甕	SX03	器高 (2.2)	堅緻	中粒砂 (並) 含有	7.5Y6/1 灰色	—		内外面 : ロクロナデ	
20	12	須恵器	甕	SX03	頸部径 : [20.4] 器高 (6.0)	堅緻	中粒砂 (並) 含有	5Y6/1 灰色	—		外面 : 平行叩き、内面同心円当て具痕	外面自然釉有　内面頸部接合部に割れ有
21	27	近世陶器	甕	おちこみ 2	残存高 :(10.2)	堅緻		表面 :5YR4/4 褐色、断面 :5YR6/1 灰色	—	近世		越前か
22	28	須恵器	坏蓋	東側落ち込み周辺	つまみ径 :3.3 つまみ高 :0.8 器高 :(0.8)	堅緻	細粒砂 (少) 含有	N7/ 灰白色	—	Ⅲ期か	内外面 : ロクロナデ	

第３表　古府しのまち遺跡　出土遺物観察表

掲載No.	実測No.	識別	器種名	出土地点	法量	焼成	胎土	色調	残存	時期	調整	備考
23	29	須恵器	坏Ａ	東側落ち込み周辺	口径：[20.8] 器高：(2.9)	堅緻	5mm以上の円礫含有	7.5Y6/1 灰色	底:21/36	飛鳥か	内外面：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り後ナデ	
24	30	須恵器	坏Ａ	東側落ち込み周辺	口径：[11.3] 器高 (5.0)	堅緻	細粒砂（黒色粒）含有	7.5Y7/1 灰白色	口:3/36		内外面：ロクロナデ	沈線１条あり
25	32	須恵器	甕か	東側	口径： 底径：(9.2)	堅緻	中粒砂（多）含有	5Y6/1 灰色	底:12/36			底に工具痕有
26	33	須恵器	甕	東側	残存高 (3.5)	堅緻	4mm以上の角礫含有	7.5Y5/1 灰色	–		内外面：ロクロナデ	
27	35	土師		東側	全長 6.2 最大幅 3.4 孔径 1.55 重量 8.5.9g	良好	粗粒砂（少）含有	2.5Y8/2 灰白色	–			
28	54	須恵器	坏蓋	北区東側	口径：[20.8] 器高 (2.5)	堅緻	細粒砂（並）含有	N6/ 灰色	口:2/36	第～Ⅳ期か	内外面：ロクロナデ	
29	55	須恵器	坏Ａ	北区東側	口径：[12.3] 器高 (2.5)	堅緻	細粒砂（並）含有	N6/ 灰色	口:4/36	Ⅵ期か	内外面：ロクロナデ	
30	56	須恵器	壺	北区東側	器高 (1.2) 底径：[8.4]	堅緻	3mm程度の円礫含有	5Y7/1 灰白色	底 9/36	Ⅵ期以降	内外面：ロクロナデ、 底面：ヘラ切り後ナデ	
31	59	須恵器	無台盤Ａ	北区東側	口径：[15.6] 底径：[12.3] 器高 (2.2)	堅緻	細粒砂（並）含有	N7/ 灰白色	口:4/36	Ⅳ期か	内外面：ロクロナデ、 底面：ヘラ切り後ナデ	
32	60	須恵器	有台盤Ｂ	北区東側	底径：[11.8] 器高 (2.7) 高台 0.8	堅緻	粗粒砂（白色粒）（並）含有	7.5 Y7/1 灰白色	底 6/36	Ⅳ期か	内外面：ロクロナデ、 底面：ヘラ削り	
33	48	土師器	有台埦	北区東側	器高：[2.3] 底径：[7.2] 高台高 :1.0	良好	粗粒砂（並）赤色粒含有	10YR8/3 浅黄橙色	底 4/36	Ⅵ期か		
34	44	土師器	有台埦	北区東側	器高 (1.9) 底径 :6.0 高台高 :0.6	良好	粗粒砂（少）含有	10YR8/2 灰白色	底 36/36		内外面：ロクロナデ	
35	45	土師器	有台埦	北区東側	器高 (1.9) 底径：[6.1] 高台高 :0.9	良好	中粒砂（並）含有	10YR8/3 浅黄橙色	底 6/36	Ⅵ期か		
36	58	土師器	皿か	北区東側	口径：[15.0] 器高：[3.6] 底径：[8.0]	やや不良	細粒砂（並）含有	2.5 YR7/2 灰黄色	口:2/36	Ⅵ期か	内面：ヘラミガキ	内面黒色
37	57	土師器	皿	北区東側	口径：[11.6] 器高 (2.2)	良好	密	7.5 YR6/6 浅黄橙色	口:3/36	Ⅵ期か		外面赤彩
38	68	土師器	小皿	北区東側	器高 (1.3) 底径：[4.6]	堅緻	細粒砂（並）含有	10Y R8/2 灰白色	底 :12/36	Ⅵ期か		表面摩耗
39	47	土師器	小皿	北区東側	器高 (1.4) 底径：[5.0]	やや不良	粗粒砂（少）含有	10YR8/1 灰白色	底 :15/36	Ⅵ期か	底面：回転糸切り	
40	62	須恵器	長頸瓶	北区東側	頸径 :7.0	やや不良	密	2.5Y8/2 灰白色	–		内外面：ロクロナデ	頸部、円盤充填後、穿孔頸部貼付け
41	51	須恵器	坏Ａ	北区東側	口径：[14.8] 器高 (7.5)	堅緻	極粗粒砂（多）含有	7.5Y7/1 灰白色	–		内外面：ロクロナデ	
42	64	須恵器	坏Ｄ	北区東側	最大径：[13.6] 器高 (4.7)	堅緻	細粒砂（並）含有	7.5 Y7/1 灰白色	–		内外面：ロクロナデ	外面に沈線２条
43	65	須恵器	坏Ｄ	北区東側	最大径：[21.1] 器高 (7.6)	堅緻	密	7.5 Y6/1 灰色	–		内外面：ロクロナデ	口部のみ残存
44	66	須恵器	坏Ｆ	北区東側	口径：[17.3] 器高 (4.5)	堅緻	細粒砂（並）含有	N7/ 灰白色	口:4/36		内外面：ロクロナデ	外面に沈線２条
45	67	須恵器	甕	北区東側	器高 (8.9)	堅緻	5mm前後の白色粒含有	N6/ 灰色	–		頸部：同心円当具痕	
46	50	土師器	長釜	北区東側	器高：[1.8]	良好	粗粒砂（少）含有	7.5YR7/4 にぶい橙色	–	Ⅵ期	内外面：ロクロナデ	被熱有
47	53	陶錘		北区東側	全長 7.37 最大幅 3.33 孔径 1.13 重量 88.2g	堅緻	密	N7/ 灰白色	–			
48	39	土師器	長釜	北区中央	器高 (2.1)	良好	極粗粒砂（少）含有	10Y R8/1 灰白色	–	Ⅵ期		
49	70	土師器	鍋	北区西側	器高 (1.8)	良好	粗粒砂（並）含有	2.5Y7/4	–	Ⅵ期		被熱あり
50	71	須恵器	鉢Ｂ	北区西側	器高 (3.9)	堅緻	細粒砂（並）含有	5Y7/1 灰白色	–		内外面：ロクロナデ	
51	37	土師器	皿	北区Ⅱ～2 層	口径：[13.4] 器高 2.9 底径：[9.8]	やや不良	密	5YR/1 灰白色	底 :10/36	第～Ⅳ期か	内外面：ロクロナデ、 底面：ヘラ切り後ナデ	
52	42	土師器	皿	北区	器高 (1.1) 底径：[5.4]	良好	密	10YR8/2 灰白色	底 :11/36	Ⅵ期か		
53	41	土師器	埦	北区	器高 (2.1) 底径：[5.4]	良好	密（赤色粒含有）	7.5YR8/4 浅黄橙色	底 :10/36	Ⅵ期か		
54	43	須恵器	小型壺	北区	口径：[7.0] 器高 (2.1)	良好	密	N6/ 灰色	口:3/36			
55	40	土師器	かわらけ	北区	口径：[9.5] 器高 (1.4)	良好	密	10YR8/2 灰白色	口:7/36	中世	底面：回転糸切り	
56	72	須恵器	坏蓋		口径：[16.1] 器高 (1.8)	堅緻	細粒砂（並）含有	N6/ 灰色	口:3/36	第３～Ⅲ期か	内外面：ロクロナデ、上端：ヘラ削り	
57	1	土師器	高坏	表採	脚部径 10.7 脚基部径 :4.0 器高 (9.0)	良好	極粗粒砂（並）含有	7.5Y8/4 浅黄橙色	–		外面ケズリ	脚部のみ 古墳後期～古代Ⅲ期
–	26	土師器	長釜	P10	残存高 :(5.5)	良好			–		外面：平行叩き、内面平行当て具痕	

・時期：田嶋明人氏の北陸古代土器編年軸：田嶋明人 1998「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題（報告編）』を参考として記載している。
・法量：復元値は［ ］、残存値は（ ）として表記している。

第Ⅲ章　小松城跡発掘調査

第１節　調査の概要

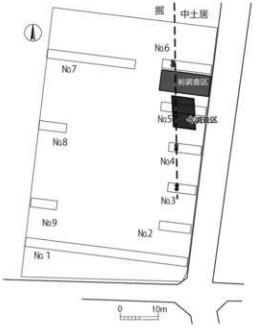
１　調査に至る経緯

小松市丸内町（まるのうち）地内の分譲宅地で、造成工事に係る平成28年度発掘調査地に隣接する土地の住宅新築工事が計画され、平成29年11月16日付で建築主より埋蔵文化財の取り扱いについて協議書が提出された。

当初は、石垣を残したままでの建築計画が検討されたが、石垣を取り除かなければ柱状改良工事ができない問題は解決されず、発掘調査で対応することになった。平成29年11月27日付で、土木工事等のための発掘届、発掘調査依頼が提出された。

２　調査の経過

着手は12月4日、造成土の搬出から始まった。12月7日より作業員が入るが、季節的に天候不順であり、かつ梯川沿いの砂地のために川の水位まで水が湧き出すという悪条件が重なり、作業が難航した。



第11図　丸内町試掘調査位置図（S=1:1,000）

着手早々、狭い調査地に造成土の砂が流入するのを防止する対策が必要になる。シートで養生しても、雨水がその下を流れて砂の流入が止まらない。試行錯誤の末、シートの端に全周溝を掘り、埋めて固定する方法で大幅に改善できた。

雨天日と降雪日、週休日を挟んで5日間の作業で、石垣の残存部分を掘り出し、12月15日に空中写真撮影をし、同日に堀の断面図作成等の補足作業を行ない、現地調査を完了とした。その後、天候を見ながら12月22日までに埋め戻しを完了し、現地を建築主に引き渡した。

空中写真は図化するために業務委託で撮影したものだが、撮影時期が12月だったこと、発掘調査費用が予算段階での想定の2倍近くに膨らんだことから、年度を改めて予算措置することとし、図化業務は令和元年度に実施した。

第２節　遺構と遺物

今調査では出土遺物はなく、石垣の残存部分とその内側の栗石を検出したのみであった。

石垣は、既往の全ての調査結果と小松城の縄張りを重ねて得られる曲輪の想定線と、隣接する前調査の結果から、調査地を南北にやや傾いて一直線に横切ると予想して調査区を設定したのだが、結果的に、調査区内で鉤の手に屈曲することが明らかになった。

石垣の屈曲部は欠損しており、ピンポールを刺しても、石や胴木などに当たらなかった。屈曲部に残る最下段の石は掻き出された栗石に覆われ、土層断面にも、堀底の泥に潜り込むように曲輪の砂と栗石が堆積しているのを見ることができる。

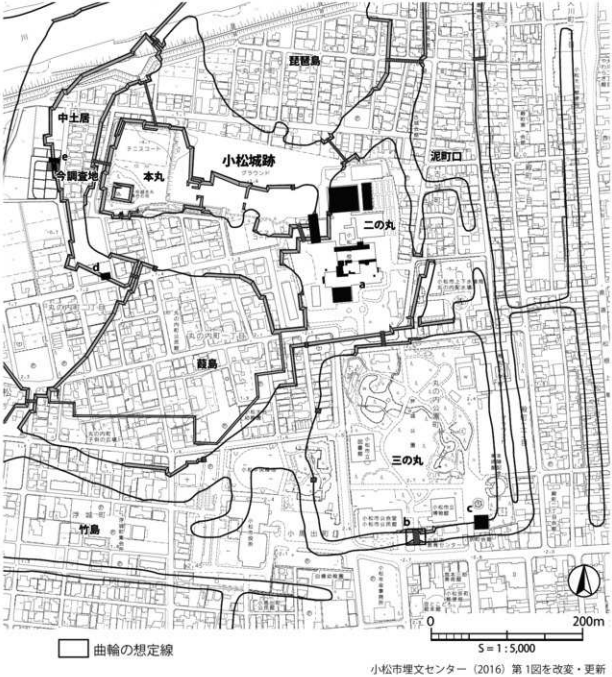
屈曲部の工法については、曲輪内に食い込むように石垣を積んで一旦工区を区切り、ここから丁字に継ぎ足している。曲輪内に食い込む部分が地表まで見えていたかどは分からない。中土居の調査は今回で3回目だが、石垣は下から2段分までしか残っていない点で共通している。

第3節　まとめ

中土居は、前田利常の隠居城として新たに縄張りし、本丸を囲む曲輪のひとつとして拡張整備された。主に土蔵が置かれていた様子が絵図に残っている。

明治6年1月に政府が布告通達した「城郭存廃決定」に小松城の名は挙がらなかったが、これに先行して、石川県がすでに城の取り壊しと耕地化の計画について所管の大蔵省と調整しつつ着手しており、廃城は既定事項となっていた。

中土居の外側の堀は「白鳥堀」といい、堀の中では最も幅が広く、明治20年10月測量の地形図



小松市埋文センター（2016）第1図を改変・更新

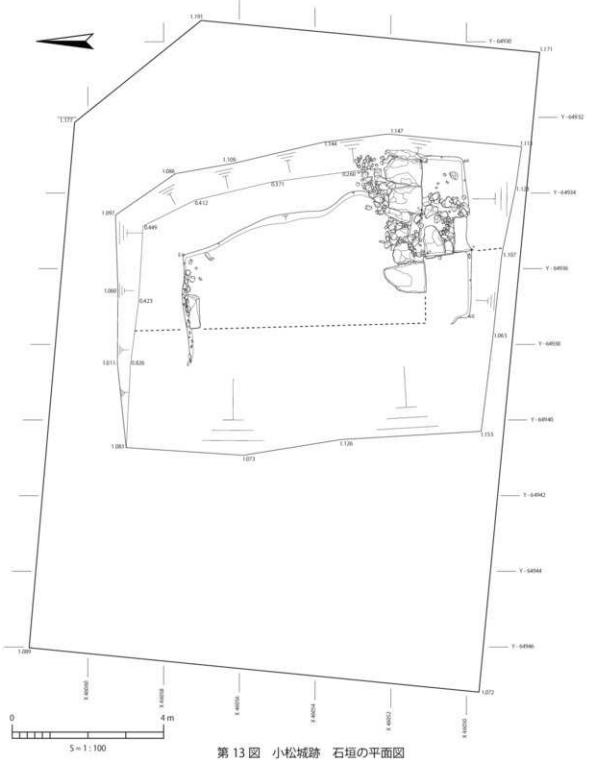
a 発掘調査（H11～16）調査主体：石川県
b. 工事立会い調査（H20）調査主体：小松市
c. 発掘調査（H21）調査主体：小松市
d. 発掘調査（H24）調査主体：小松市
e. 発掘調査（H28）調査主体：小松市

第12図　小松城跡　調査履歴図

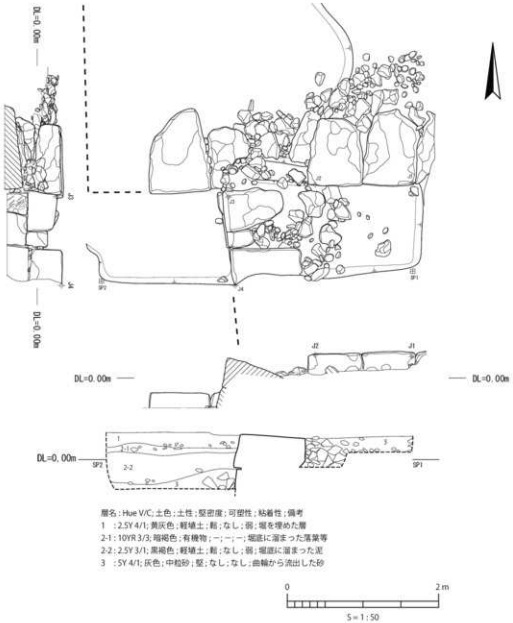
が作成された段階でまだ埋立てられていない様子だが、明治 33 年 4 月払下げの段階では、「白鳥堀ノ部」として公園に記載されている。中土居に当たる字名は「中島ノ部」である。

埋蔵文化財包蔵地としての「小松城跡」は民間に払い下げられなかった範囲に限り、城郭の遺構の大部分は失われたままであった。

平成 11 年度の県立小松高等学校改築工事に係る発掘調査を皮切りに、小松城跡の調査は、今調査で通算 8 回目（小松市調査は 4 回目）を数える。断片的ながら、絵図からある程度の精度で縄張りを地図上に再現できるものの、今調査における屈曲部の検出は、ディテールの修正がまだまだ必要なことが示されたといえよう。



第 13 図　小松城跡　石垣の平面図



第 14 図　小松城跡　石垣・堀の立面図及び断面図

参考文献

市史編集委員会 1999『新修小松市史』資料編 1 小松城

石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター 2007『小松市 小松城跡』

小松市教育委員会 2011『小松城跡発掘調査報告書』

小松市教育委員会 2015「第Ⅲ章 小松城跡発掘調査」『小松市内遺跡発掘調査報告書 XI』

小松市埋蔵文化財センター 2016『小松城跡発掘調査報告書 II』

三浦純夫 2020「第八章 第一節 小松城と城下町」『新修小松市史』資料編 17 考古 市史編集委員会

第Ⅳ章　本折城跡発掘調査

第 1 節　調査の概要

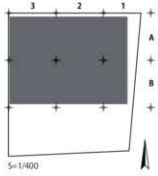
1　調査に至る経緯

小松市上本折町地内での住宅新築計画について、平成 30 年 3 月 13 日付けで個人（以下、依頼主）より埋蔵文化財の取り扱い協議を受けた。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「本折城跡」の範囲に含まれており、なおかつ依頼主とは別の事業主から協議を受け、すでに試掘調査を実施していた区域であった。試掘調査は前年 12 月 22 日に実施し、区域内に設定した試掘坑から埋蔵文化財が確認されていた。この結果を以って、同日付けで依頼主に適切な保護措置が必要な旨を通知した。

協議の結果、計画された地盤改良工事が地下の埋蔵文化財に影響を与えるものと判断されたため、発掘調査による記録保存で合意。文化財保護法第 93 条に基づく発掘届の提出を受けるとともに、協定書を交換して 4 月 10 日に発掘調査に着手した。

2　調査の方法

調査は隣地境界杭を利用して、5m 間隔のグリッドを設定した。平面図及びセクションポイントは、4 級基準点測量及び 3 級水準測量成果に基づき光波測距儀で得られた座標を用いて、必要に応じて 40 分の 1、20 分の 1 に図化した。土坑番号は既報告（小松市教委 2015）からの通し番号に倣った。

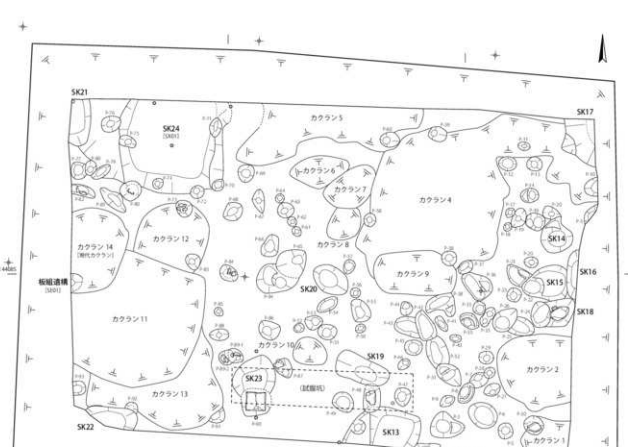


第 15 図　本折城跡　グリッド配点図

3　調査の経過

4 月 10 日～ 11 日に表土除去、4 月 12 日にグリッド設定等現場整備を行い、4 月 13 日より包含層掘削及び遺構精査を開始した。その際、調査区周辺に廃土置き場が少なく、グリッドに合わせて大きく 3 ブロックに分けて遺構の精査・掘削を行い、必要に応じてセクション図を作成した。4 月 22 日より掘削と並行して平面図作成を開始、4 月 29 日には人力での掘削・図化作業を完了した。4 月 30 日に重機による埋め戻しと現場からの撤収作業を終えた。

第 16 図　本折城跡　調査地位置図



第 17 図　本折城跡　平面図

第 2 節　層位の所見

現況面から約 60 ～ 80cm 下までは現代の造成土に覆われ、さらにその下に焼土や炭化物を多く含む遺物包含層が厚く堆積していた。この包含層はオリーブ色系の土色を呈し、近世・近代を主体として中世以前の遺物も混ざる。遺構検出面で多く認められた撹乱（個別表記はカタカナ）は包含層由来の覆土で、なおかつ黒色系の遺構覆土をもつ SK13 以外は、ほとんどの遺構でこの撹乱土が混ざったような覆土が確認された。これらの状況は、近世・近代以降にそれより古い中世以前の遺構が大きく削平・撹乱を受けていることを示すものである。調査区西壁セクション（第 19 図）からも、そうした状況が読み取れる。なお既往の調査（小松市埋文 2015）により、本遺跡の属する主な時期は中世後期～近世成立期であることが明らかになっている。

以上を踏まえ、撹乱はオリーブ色系の覆土とともに掘り方が一定でなく不明瞭なものや、出土遺物が近世以降に偏るものを主な認定基準とした。遺構としたものは、黒色系の覆土をもつ SK13 のほかに、掘り方がある程度明瞭で覆土が均質であることや出土遺物に中世以前のものが一定量含まれることを目安とした。中でも、遺構下層位にややまとまって中世遺物が検出された SK24 等は、削平・撹乱を免れてわずかに残存したものと推測される。

第３節　遺構と遺物

1　遺構（第 19 図）

近接する幸町遺跡報告（小松市教委 2005）を一部参照しながら分類した。

（1）廃棄土坑［SK14 ～ 16・19 ～ 24］

相対的に浅いものが多く、上位層と覆土層が遷移的なもの。大型の SK24 とそれ以外の中小型のものに分けられる。大型の SK24 は前述したとおり下層位に中世の遺物がまとまっており、15 世紀後半～ 16 世紀前半頃の土師器皿（第 21 図 8 ～ 12）や越前甕（第 23 図 48）に石鉢（第 26 図 105）・石臼（第 28 図 117）が伴う。上位層と覆土層はセクションでは遷移的であったが、界面に集石があり、ここで上下に分層した。中小型のものは一部調査区外に広がるため不確定であるが、概ね平面形が楕円形や円形となる。SK19 から土師器皿（第 21 図 6・7）や石塔相輪（第 27 図 116）、鍛冶滓が、SK21 から天目茶碗（第 21 図 30）、石鉢・行火（第 26 図 104・108）が、SK23 から珠洲擂鉢（第 22 図 39）と鍛冶滓が、それぞれ出土している。

（2）湧水土坑［SK17］

掘り方が湧水準に達するもの。井戸側は検出されなかった。SK17 が該当し、土師器皿（第 21 図 4・5）のほか、鍛冶滓（第 30 図 125 ～ 128）が多く出土した。ほかに、撹乱と認定したカクラン 11 からも湧水がみられた。

（3）複合ピット［SK13 ＋ P-2］

プラン確認の段階では単独の土坑と思われたが、完掘状況でピットの複合となったもの。SK13 と P-2 は一部調査区外に出るが、ともに不整な隅丸方形になると推測される。SK13 の覆土は均質な黒褐色土で、古瀬戸皿（第 21 図 29）や大型のフイゴ羽口（第 30 図 124）が出土したが、16 世紀後半以降の土師器皿（第 21 図 3）や近世以降の遺物（第 24 図 87、ほか未図化の土瓶片等）が混ざり、単純な中世の遺構とは言い難い。

（4）礎石ピット［SK18、P-30・48・90］

礎石と思われる石材を掘り込み内に据えたもの。SK18、P-30・48 は自然礫、P-90 は加工した板石（第 29 図 120）が据えられていた。確実に建物となる組み合わせは認められなかった。

（5）板組遺構

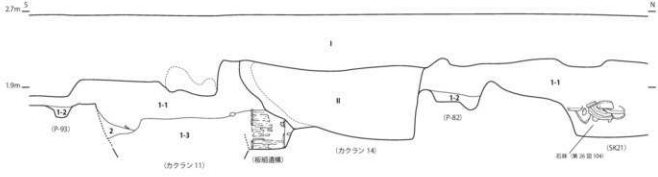
調査区西壁際で辛うじて確認した、掘り込みを伴う横板組の不明遺構。板組は長辺 36cm、短辺 18cm の平面長方形。わずかな木質と板を固定した釘が残存していた（第 18 図）。井戸とするにはやや小さすぎる感がある。上面を現代の撹乱（カクラン 14）に削られ、4 ～ 5 段が残存。覆土中からは 14 世紀前半の越前甕（第 23 図 47）とともに定型化した七輪（第 25 図 92）が出土しているため、近現代まで上部が開口していたと考えられる。

第 18 図　本折城跡　板組残存の木質と釘

2　遺物（第 20 ～ 31 図）

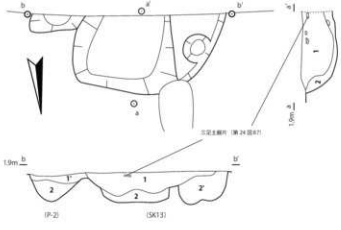
遺構外出土を含む遺物の時期は、弥生時代後期から、古代、中世、近世以降に及ぶが、報告は本遺跡が属する主な時期である中世後期から近世成立期（14 ～ 16 世紀）に主眼を置いた。それより新しい時期の遺物については、一部を除いて省略した。

調査区西壁セクション



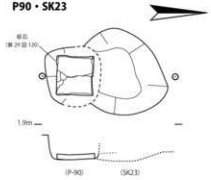
層名：Hue V/C；土色・土性；備考
I：2.5Y 5/2 ～ 4/2；暗灰黄色砂壌土；現代造成土
II：2.5Y 4/2；暗灰黄色砂；現代カクラン
1-1：2.5Y3/3；暗オリーブ色砂；しまりあり、焼土・炭化物・礫含有
地山斑あり＝包含層
1-2：2.5Y3/3；暗オリーブ色砂；1-1 より地山斑極めて多い
1-3：2.5Y3/3；暗オリーブ色砂；1-1 に黄灰色砂（2.5Y4/1）混じる
2：2.5Y/5/6；黄褐色砂；しまりなし、暗オリーブ色砂（2.5Y3/3）が
斑状に混じる＝地山砂のくずれ？

P-2・SK13

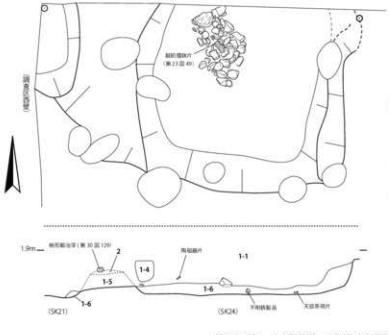


層名：Hue V/C；土色・土性；備考
1：10YR 3/4；黒褐色砂；しまりあり、焼土・炭化物少量、遺物含有
1'：10YR 3/4；黒褐色砂；1 よりやや明るい色調、焼土・炭化物なし、
遺物なし
2：2.5Y3/3；暗オリーブ褐色砂；しまりあり、地山斑あり
2'：2.5Y3/3；暗オリーブ褐色砂；2 より地山斑少なくやや暗い色調、
炭化物極少量

P90・SK23



SK21・SK24 [SX01]



層名：Hue V/C；土色・土性；備考
1-1：2.5Y3/3；暗オリーブ色砂；調査区西壁セクションに同じ
1-4：2.5Y3/3；暗オリーブ色砂；1-1 より焼土極めて多い
1-5：2.5Y3/3；暗オリーブ色砂；焼土なし、1-1 より炭化物少なく
地山斑多い
1-6：2.5Y3/3；暗オリーブ色砂；1-1 に黄灰色砂（2.5Y4/1）混じる、
1-1 より焼土少なく地山斑多い、遺物含有
2：2.5Y/5/6；黄褐色砂；しまりなし、暗オリーブ色砂（2.5Y3/3）が
斑状に混じる＝地山砂のはりつき？

※地山：2.5Y5/6 ～ 4/3；黄褐色～オリーブ褐色砂；しまり弱い、
粒径が比較的均質な細砂

第 19 図　本折城跡　遺構実測図

（1）弥生時代後期の遺物（1・2）

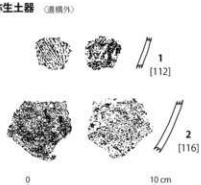
1は甕（鍋）、2は壺の胴部片。1は器面調整から当該期の所産と推測され、2も同時期あるいはその前後する時期と思われる。

（2）古代の遺物

須恵器片を3点確認。いずれも小片で器種器形は不明。

（3）中世の遺物（3 ～ 86）

土師器（3 ～ 23）　手捏ねの土師器皿（かわらけ）で、周辺の調査成果同様、大まかに京都系（薄手・粘土質）と在地系（厚手・砂粒含有）に分けられる。京都系（8・9）の端部調整や見込み処理、ほか在地系の口縁が強く外反する器形は15世紀後半～16世紀前半頃に中心があると推測される。一方、3・5・13は京都系の範疇だが、口縁端部摘み上げや幅のやや狭い口縁一条ナデの状況から16世紀後半以降と考えられる。12の把手付き器形は16～17世紀にかけて存在するが、共伴する土師器皿の特徴から16世紀前半代とみたい。



第20図　本折城跡　遺物実測図1

陶磁器（24 ～ 38）

青磁（24 ～ 28）　24と25は稜花皿、27と28は細描きの蓮弁文碗で、15世紀後半～16世紀初頭の年代観を有する。

古瀬戸／瀬戸・美濃（30 ～ 38）　30は天目茶碗、31 ～ 38は灰釉の碗皿類で、古瀬戸後期後半から大窯前半期（15世紀中頃～16世紀前半）の所産と考えられる。

炻器（39 ～ 80）

珠洲（39 ～ 46）　42 ～ 45は甕、39 ～ 41は擂鉢で、口縁の特徴から珠洲Ⅳ期以降が中心。

越前／瓷器系（47 ～ 80）　47・48・51 ～ 61は甕、50は壺、49・63・64は擂鉢で、特に甕口縁は越前Ⅲ-1期からⅤ-3期の変遷が追える。

瓦質土器（81 ～ 86）　燻しが良好な一群（81 ～ 84）と土師質の一群（85・86）がある。前者はつくりがシャープで、81は風炉の直立口縁・雷文、82と83は火鉢あるいは風炉の内湾口縁・重菱形文で同一個体となる。84は火鉢あるいは風炉の三脚が付く底部で、81もしくは82・83と同一である。これらはおおよそ14世紀末～15世紀後半頃の所産と考えられる。後者については前者よりも後出するもので、85は浅鉢形あるいは深鉢形、86は三足の小型鉢形となり、いずれも下向きの半花文をもつ。86は海綿骨針を含む胎土で、在地産の可能性がある。

（4）近世以降の遺物（87 ～ 92）

遺物の大半を省略したが、遺構に伴うものや残存率の高いものを抽出した。87は三足の鉢と思われる土器、88は徳利、89はサヤ、90は市内の大川遺跡にも類例がある19世紀の片口鉢、91は土錘、92は近代に定型化した珪藻土製の七輪。ほか多くの陶磁器類が出土している。

（5）石製品（93 ～ 120）

硯（93・94）　大（94）と小（93）の2種がある。

砥石（95 ～ 102）　おおよそ粗砥石（99）、中砥石（95 ～ 98、100）、仕上げ砥石（101・102）に分けられ、被熱するものもある。99は行火の転用品。

火打ち石（103）　石英質の石材で、全体に敲打痕や傷があり、火打ち石と判断した。図正面の溝状の傷は、火打ち金を擦った痕跡かもしれない。

石鉢（104 ～ 107）　把手付き（104・105）や三脚のもの（104・107）がある。104はほぼ完形

で出土しており、外側面から内側面上半は表面滑らかに研磨され、内側面下半から内底面及び外底面に工具痕が顕著に残る。内底面中央付近はやや摩滅しており、使用痕の可能性がある。106は内底面が摩滅するとともに、内面から破面、外側面上端にかけて被熱している。鉢として使用した後、破損して残存した底部を火鉢に転用したものか。

行火（108～115） 108・112は前方開口のⅠ種、113・114は上方開口で平面D字形のⅡ種a類、115は上方開口で平面O字形のⅡ種b類、110と111はⅡ類の蓋である（垣内1990分類による）。Ⅰ種は14世紀末頃から、Ⅱ種は15世紀中頃～16世紀前半に使用が始まり、16世紀後半以降はⅡ種b類が現代まで続くとされる。いずれも被熱を受ける。

相輪（116） 石塔相輪の請花部分の破片で、いわゆる「加賀型宝塔」か。

石臼（117・118） いずれも粉挽き臼で、117は下臼、118は横打ち込み式の上臼である。

管状（119） 口が開く管状の製品で、用途は不明。

板状（120） P-90の底面に敷かれていた正方形に近い重厚な板状の製品。左の図面が出土上面で、表面が滑らかに研磨され、中央右寄りに未貫通のホゾ穴がある。一方、右の下面には工具痕が顕著に残るが、縁の一部が研磨される。図面上辺の側面は一部張り出して凸線状となり、刻み目が入る。図面下辺の側面は横方向に強く研磨されて凹む。中央付近に加重がかかった痕跡が平面や断面から観察されたため、礎石と判断したが、元々は別の用途で用いられた製品を転用したものかもしれない。

以上のうち、石鉢、行火、相輪、石臼、管状・板状製品には、地元産凝灰角礫岩系の石材が使用されている。中でも、104の石鉢は赤穂谷石の可能性がある。

（6）鉄製品（121～123）

121・122は包丁、123は刃物柄の可能性があるもので、包丁は近世以降の所産と考えられる。

（7）鍛冶関連遺物（124～139）

124は炉壁付きの大型フイゴ羽口。125～139は椀形鍛冶滓。鍛冶滓は磁着度の大きい確実な含鉄品を分類対象とした（重量計6,458.1g）。これらのほかは分類対象外としたが、磁着度が非常に小さく非含鉄品と判断した鍛冶滓（重量計3,300.2g）や、釘・器種不明品を含む鉄製品（重量計764.0g）が出土している。

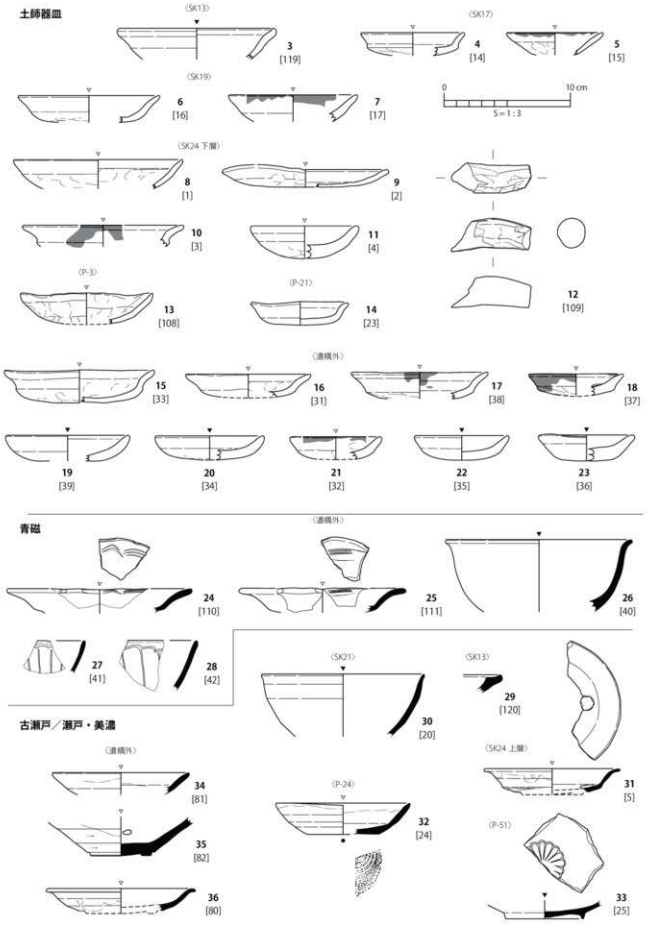
（8）銭貨（140～148）

140・141は北宋銭で、140は皇宋通寶、141は政和通寶。ほか判別できるものは寛永通寶が大半を占める。147は2枚が重なり合う。148は昭和19年発行の十銭アルミ青銅貨。

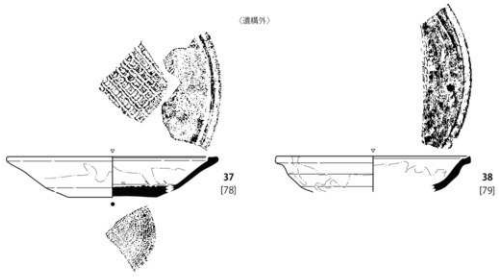
第4節　まとめ

今調査地では、中世城館跡に関する遺構は検出されなかったが、多数の中世遺物が出土した。時期は既往の調査と同じく、14世紀に始まり、15世紀後半～16世紀に集中するようである。遺物の中でも、特に瓦質土器の風炉は城館に住まう支配階級の存在をうかがわせるものとして着目される。瓦質土器自体も、他の器種と合わせると最低でも4個体（既往調査と合わせて5個体）と、調査面積に比して多く出土している。また、石塔相輪は近代庭園に転用される場合もあるが、支配階級の墓標や供養塔に関連づけられるかもしれない。

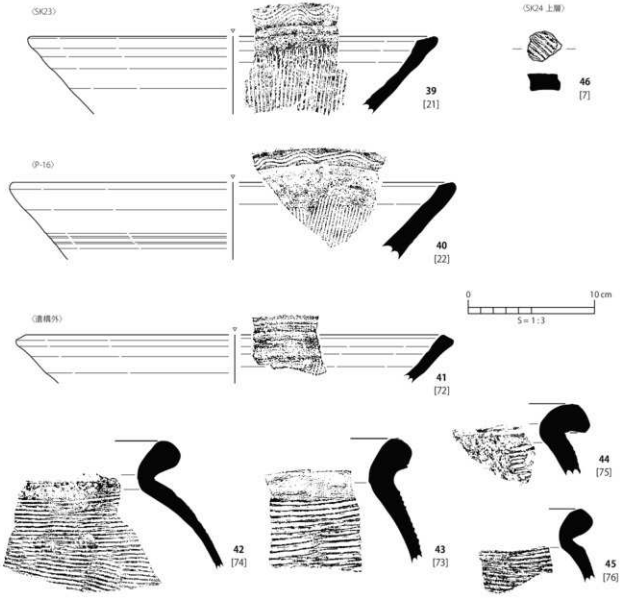
なお、大半を割愛したが近世以降も遺物は多く、土地利用も活発であったと判断され、今調査地が北国街道沿いであることに起因すると考えられる。



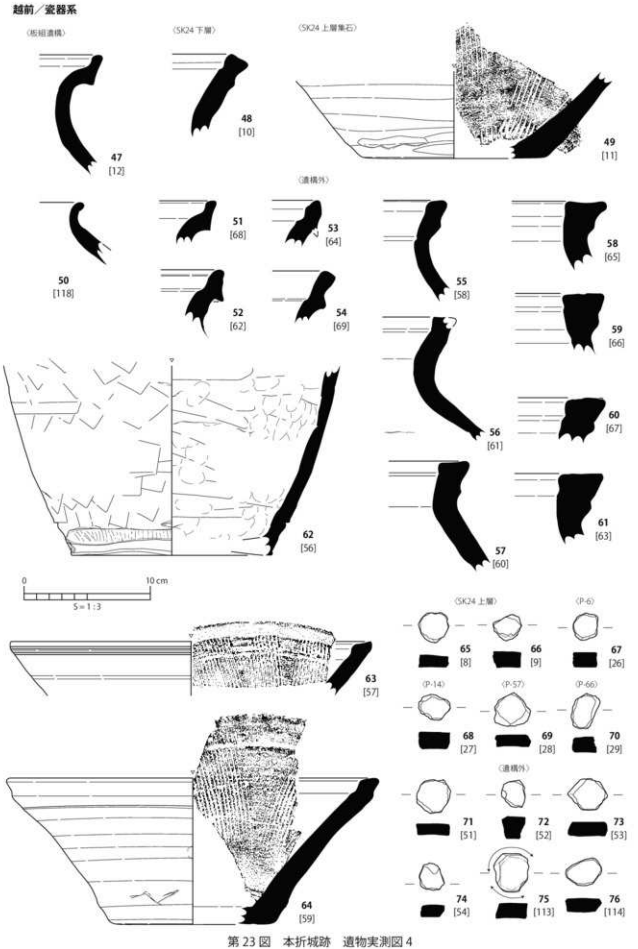
第 21 図　本折城跡　遺物実測図 2



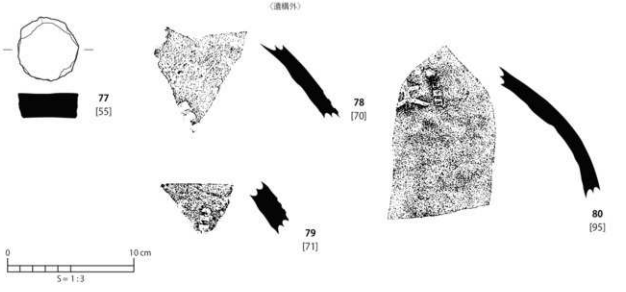
珠洲



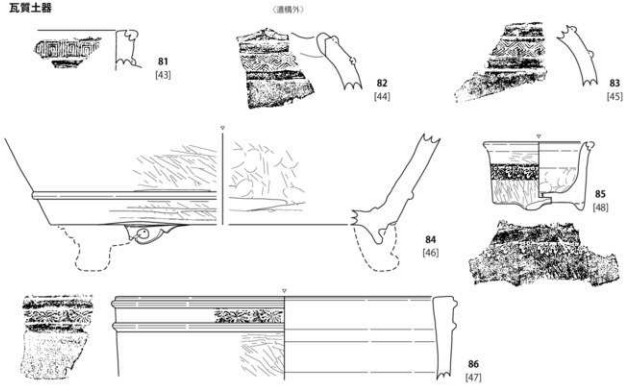
第 22 図　本折城跡　遺物実測図 3



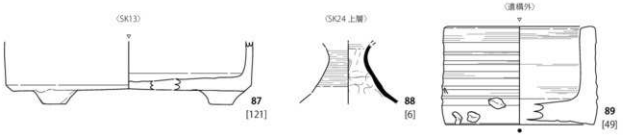
第 23 図　本折城跡　遺物実測図 4



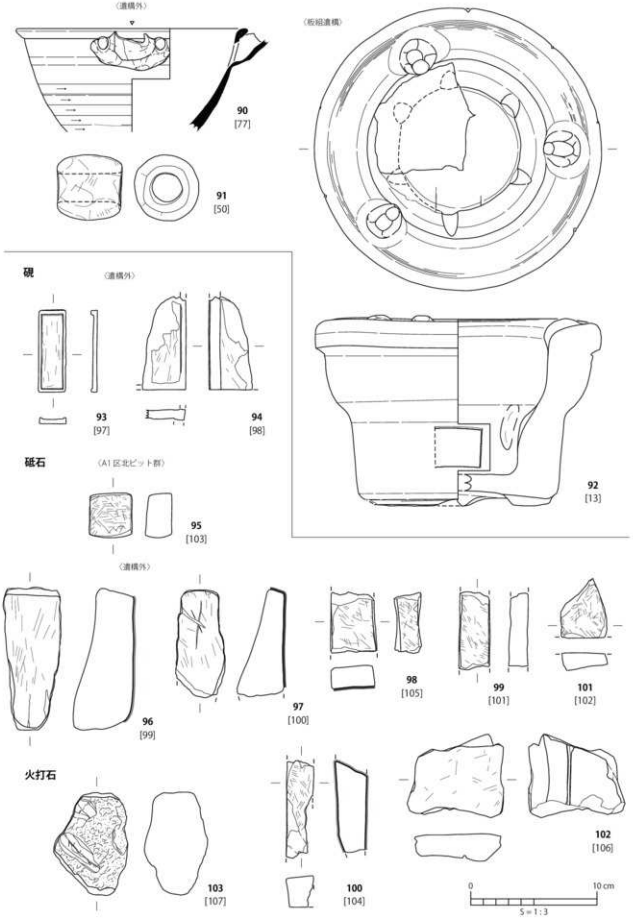
瓦質土器



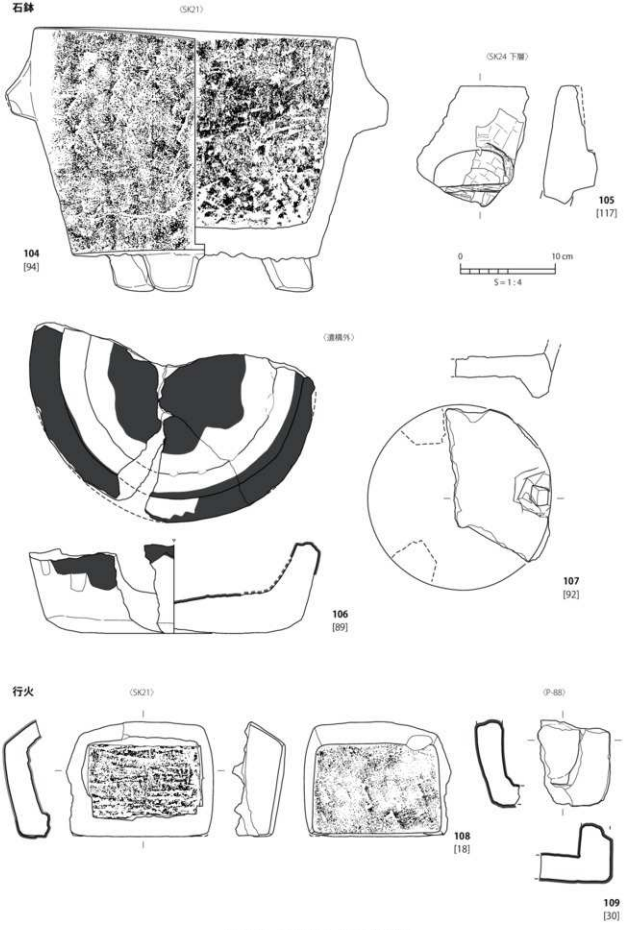
近世以降の土器・陶磁器等



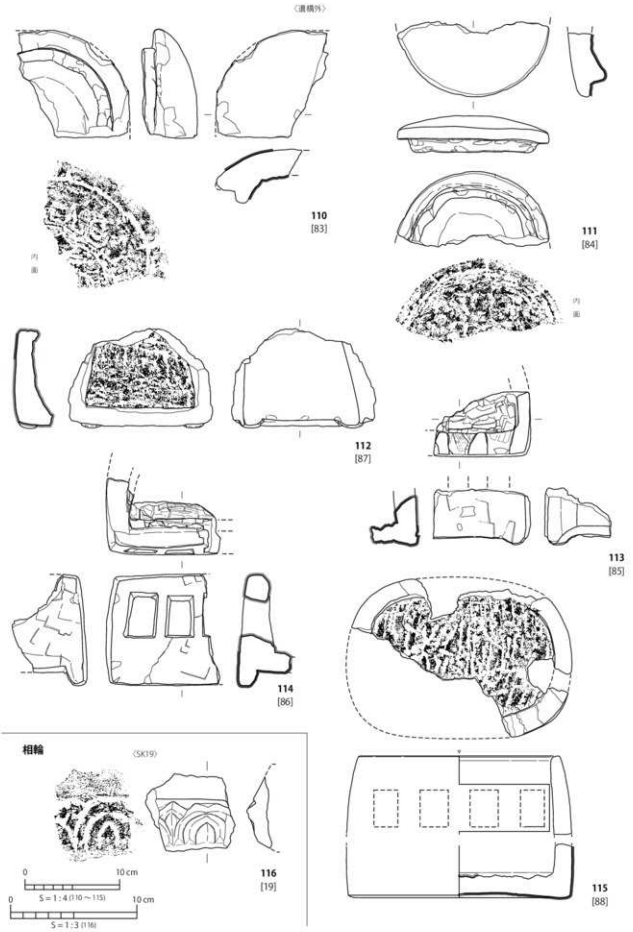
第 24 図　本折城跡　遺物実測図 5



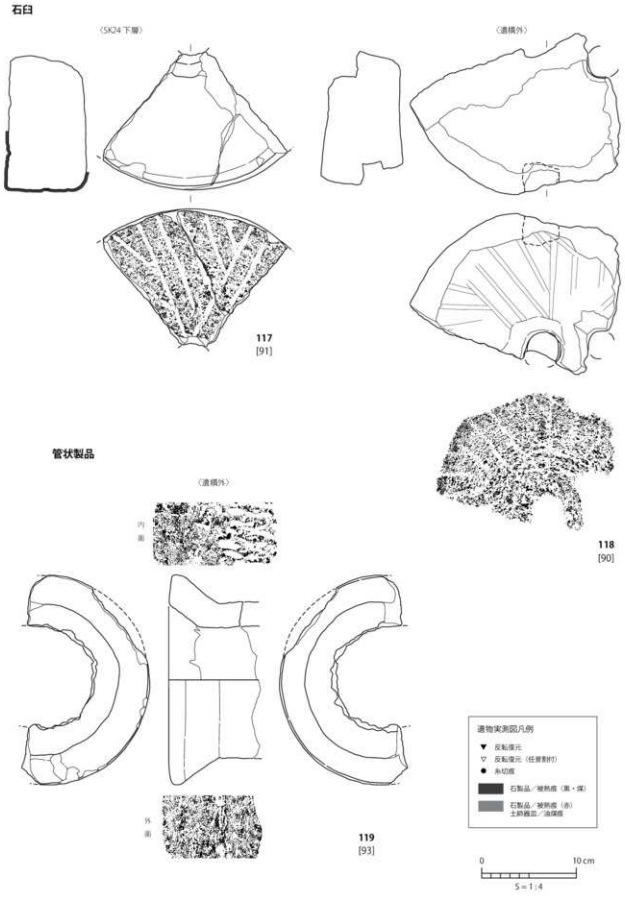
第 25 図　本折城跡　遺物実測図 6



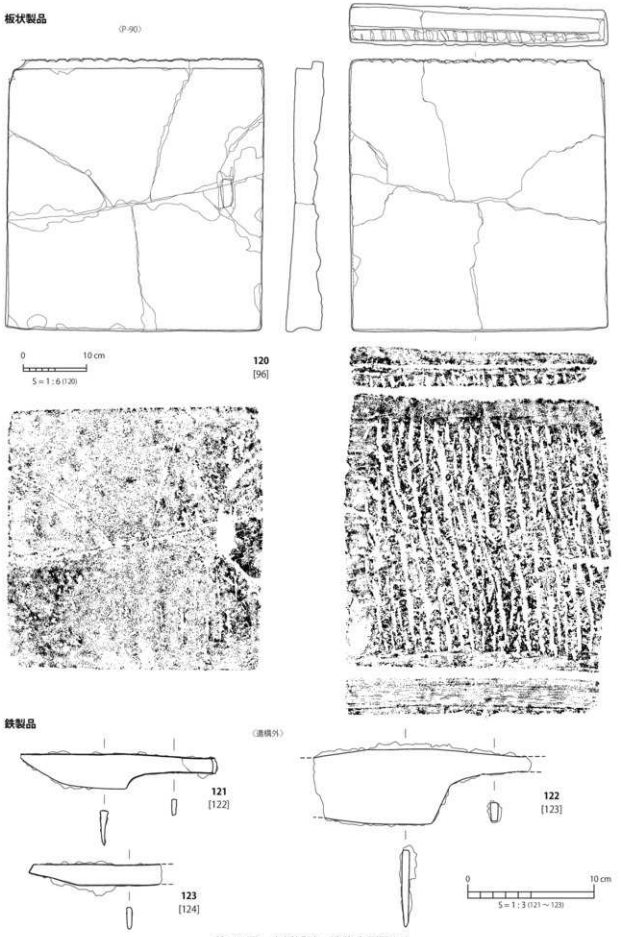
第 26 図　本折城跡　遺物実測図 7



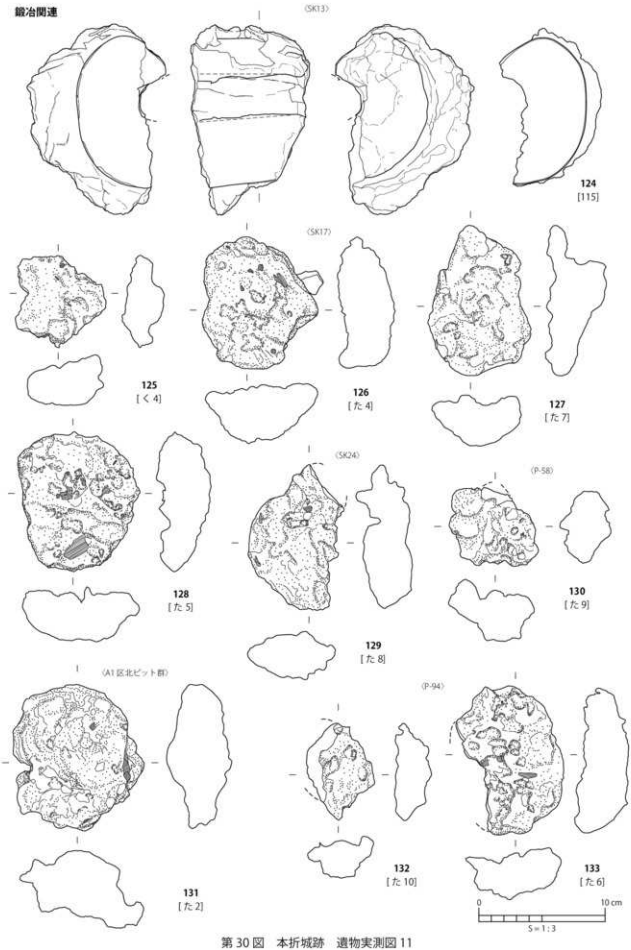
第 27 図　本折城跡　遺物実測図 8



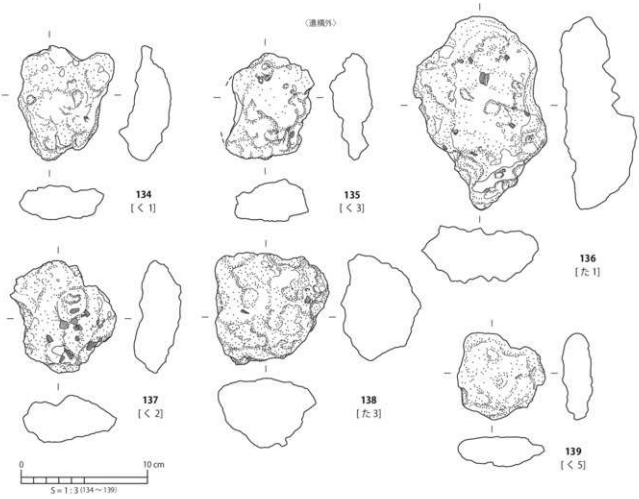
第 28 図　本折城跡　遺物実測図 9

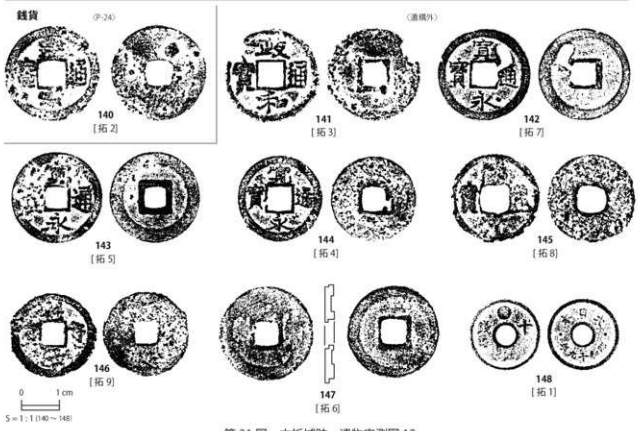


第 29 図　本折城跡　遺物実測図 10



第30図　本折城跡　遺物実測図11





第31図　本折城跡　遺物実測図12

第４表　本折城跡　遺物観察表

掲載	実測	整理	出土位置	分類	器形	寸法（長さ cm・重さ g）	種/図	表面色調	断面色調	備考
1	112		カクラン 11	弥生土器	鉢形			内 N/5、外 10YR8/4	2.5Y6/1	後期、内面ケズリ
2	116		表土・盛土	弥生土器	壺形			内 2.5Y6/1、外 10YR8/4	2.5Y7/1	外面ミガキ
3	119		SK13	土師器	皿	口 12.2		2.5Y8/1	2.5Y8/1	京都系、16c？
4	14		SK17	土師器	皿	口 8	4	10YR6/2	10YR7/3	在地系
5	15		SK17	土師器	皿	口 7.6	8	2.5Y8/3	2.5Y8/3	京都系、油煙痕
6	16		SK19	土師器	皿	口 11.1	7	5YR7/6	5YR7/6	在地系
7	17		SK19	土師器	皿	口 10.1	6	5YR7/6	5YR7/6	在地系、油煙痕
8	1		SK24 下層	土師器	皿	口 13.3	7	10YR8/3	10YR8/3	京都系、15c 後-16c 前
9	2		SK24 下層	土師器	皿	口 13、高 1.8	4	2.5Y8/3	2.5Y8/3	京都系、15c 後-16c 前
10	3		SK24 下層	土師器	皿	口 12.6	2	7.5YR8/3	7.5YR/8/3	在地系
11	4		SK24 下層	土師器	皿	口 8.4、高 2.6	2	2.5Y8/4	2.5Y8/4	在地系、油煙痕
12	109		SK24 下層	土師器	皿（把手）			10YR8/2	2.5Y8/2	在地系、16c
13	108		P3	土師器	皿	口 10.4	12	7.5YR8/6	2.5Y8/2	京Ⅳ（17c）
14	23		P21	土師器	皿	口 7.6、高 1.9	24	10YR8/4	10YR8/4	在地系
15	33		B3 区南タチワリ	土師器	皿	口 11.7、高 2.6	9	7.5YR7/3	10YR8/3	在地系
16	31		A1-3 区北タチワリ	土師器	皿	口 9.8、高 1.9	6	7.5YR8/6	10YR8/3	在地系
17	38		表土・盛土	土師器	皿	口 10.8	11	2.5Y8/4	2.5Y8/4	在地系、油煙痕
18	37		精査	土師器	皿	口 7.4	7	2.5Y8/4	2.5Y8/4	在地系、油煙痕
19	39		表土・盛土	土師器	皿	口 9.6	8	10YR8/6	10YR8/6	在地系
20	34		カクラン 13	土師器	皿	口 8.5、高 1.9	5	5YR7/6	7.5YR8/4	在地系
21	32		A2 区精査	土師器	皿	口 7、高 1.8	18	10YR8/3	10YR8/3	在地系、油煙痕
22	35		精査	土師器	皿	口 7.4、高 2	6	2.5Y8/4	2.5Y8/4	在地系
23	36		精査	土師器	皿	口 7.3、高 2	6	7.5YR7/6	7.5YR7/6	在地系
24	103		A3 区包	陶磁器	椀花紺	口 14.5	3	軸 10GY6/1	N/7	青磁、15c 後
25	111		表土・盛土	陶磁器	椀花紺	口 12.7	4	軸 7.5GY7/1	N/7	青磁、15c 後
26	40		A2 区精査	陶磁器	碗	口 14.6	6	軸 10Y6/2	N/8	青磁
27	41		B1 区精査	陶磁器	碗			軸 7.5GY6/1	N/7	青磁、細描き蓮弁文、15c 末-16c 初
28	42		精査	陶磁器	碗			軸 10Y5/2	N/7	青磁、細描き蓮弁文、15c 末-16c 初
29	120		SK13	陶磁器	折縁皿			釉 2.5Y7/4	10YR8/4	古瀬戸、後期
30	20		SK21	陶磁器	大口黒碗	口 12.8	3	7.5YR4/4	10YR6/1	古瀬戸？
31	5		SK24 上層	陶磁器	腰折皿	口 10.7	13	釉 7.5Y7/2	2.5Y8/2	古瀬戸、後Ⅳ新、15c 後、挽み皿
32	24		P24	陶磁器	緑釉小皿	口 10.6、底 5.6、高 2.5	11	2.5Y8/3	2.5Y8/3	古瀬戸、後期、15c
33	25		P51	陶磁器	皿	台 6.2	片 13	釉 7.5Y6/3	2.5Y8/2	瀬戸・美濃、見込み菊花文
34	81		A1-B1 区包	陶磁器	緑釉小皿	口 10.7	3	2.5Y6/1	N/6	古瀬戸
35	82		カクラン 4	陶磁器	平碗	台 4.9	片 19	10YR7/3	10YR8/3	古瀬戸？
36	80		カクラン 13	陶磁器	端反皿	口 11.6	4	2.5Y8/1	2.5Y7/1	瀬戸・美濃
37	78		カクラン 13	陶磁器	卸皿	口 16.5、底 7、高 3.2	7	10YR7/1	7.5YR7/1	古瀬戸、後Ⅳ期、15c 中-後
38	79		B2 区精査	陶磁器	卸皿	口 15.3	9	2.5Y8/3	2.5Y7/3	古瀬戸、後Ⅳ期、15c 中-後
39	21		SK23	石器	搭錘	口 31.9	2	N/5	N/5	珠洲、V 期、14c 後-15c 前
40	22		P16	石器	搭錘	口 34.8	4	N/5	N/6	珠洲、V 期、14c 後-15c 前
41	72		カクラン 12	石器	搭錘	口 33.3	2	N/5	N/6	珠洲、V 期、14c 前-中
42	74		A2-3 区精査	石器	鹿			N/5	N/6	珠洲、Ⅲ-1 期、15c 後-14c 中
43	73		A2 区精査	石器	鹿			5PB5/1	5PB7/1	珠洲、V 期、14c 前-中
44	75		カクラン 2	石器	鹿			N/5	N/6	珠洲、V 期、14c 後-15c 前
45	76		カクラン 13	石器	鹿			N/5	5YR5/2	珠洲、V -VI 期、14c 後-15c 後
46	7		SK24 上層	石器	砥片	長 2.71、幅 2.28、厚 1.35		N/6	2.5Y7/1	珠洲
47	12		板組遺構	石器	鹿			2.5YR4/6	N/5	越前、Ⅲ-1 期、14c 前、2 次被熱
48	10		SK24 下層	石器	鹿			5YR4/3	2.5Y7/1	越前、Ⅳ-3 期、15c 後
49	11		SK24 上層集石	石器	搭錘	底 14.5	底 10	5YR7/8	5YR7/8	越前
50	118		精査	石器	壺			5YR5/4	5YR7/6	越前
51	68		カクラン 11	石器	鹿			7.5YR5/2	7.5YR4/1	越前、Ⅲ-1 期、14c 前
52	62		カクラン 4	石器	鹿			5YR4/2	5YR5/1	越前、Ⅲ-2 期、14c 中
53	64		カクラン 3	石器	鹿			10YR5/4	2.5Y7/1	越前、Ⅲ-3 期、14c 後
54	69		カクラン 11	石器	鹿			5YR5/6	10YR6/1	越前、Ⅳ-1 期、15c 前
55	58		B3 区 EW アゼ包	石器	鹿			2.5YR4/4	7.5YR4/1	越前、V -1 期、16c 前
56	61		A1 区東タチワリ+A2 区精査	石器	鹿			5YR3/6	2.5Y7/1	越前、V -1 期、16c 前
57	60		B3 区精査	石器	鹿			2.5YR6/6	7.5YR7/1	越前、V -2 期、16c 中-後
58	65		カクラン 11	石器	鹿			2.5YR3/4	2.5Y7/1	越前、V -3 期、16c 後
59	66		カクラン 11	石器	鹿			N/6	2.5Y6/1	越前、V -3 期、16c 後
60	67		カクラン 11	石器	鹿			7.5YR3/1	2.5Y6/1	越前、V -3 期、16c 後
61	63		カクラン 3	石器	鹿			N/7	7.5YR7/1	越前、V -3 期、16c 後
62	56		A3 区精査・B2 区精査・B3 区 EW アゼ包・A2 区精査	石器	鹿	底 15.9	底 11	内 2.5YR3/2、外 5PB7/1	2.5Y6/1	瀬戸系
63	57		B3 区 EW アゼ包・カクラン 11	石器	搭錘	口 28.4	5	5YR7/6	7.5YR7/4	越前、V -3 期、16c 後
64	59		カクラン 11	石器	搭錘	口 29.1、底 12.5、高 11.6	3	2.5YR/3	2.5YR8/2	越前、V -3 期、16c 後
65	8		SK24 上層	石器	砥片	長 2.39、幅 2.36、厚 1.08		7.5YR5/1	2.5Y5/1	瀬戸系
66	9		SK24 上層	石器	砥片	長 2.29、幅 2.08、厚 1.34		5YR6/8	10YR6/1	瀬戸系
67	26		P6	石器	砥片	長 2.18、幅 1.93、厚 1.23		5YR6/6	10YR4/1	瀬戸系

掲載	実測	整理	出土位置	分類	器形	寸法（長さ cm・重さ g）	残/36	表面色調	断面色調	備考
68	27		P14	炻器	陶片	長 2.49、幅 2.01、厚 1.43		5YR3/2	7.5YR8/4 +2.5Y6/1	瓷器系
69	28		P57	炻器	陶片	長 2.84、幅 2.72、厚 1.1		5Y4/3	N/5	瓷器系
70	29		P66	炻器	陶片	長 2.79、幅 2.2、厚 1.32		2.5YR6/6	10YR7/6	瓷器系
71	51		カクラン 11	炻器	陶片	長 2.65、幅 2.62、厚 0.85		5YR4/6	N/7	瓷器系
72	52		カクラン 11	炻器	陶片	長 2.18、幅 1.88、厚 1.75		5YR4/6	10YR6/1	瓷器系
73	53		カクラン 11	炻器	陶片	長 3.14、幅 2.53、厚 1.2		2.5YR3/3	N/6	瓷器系
74	54		カクラン 11	炻器	陶片	長 2.16、幅 1.96、厚 1		5YR4/6	N/8	瓷器系
75	113		カクラン 13	炻器	陶片	長 3.02、幅 2.83、厚 1.33		内 7.5YR5/4、外釉 2.5Y4/3	2.5Y6/1	瓷器系、釉面研磨
76	114		B3 区包	炻器	陶片	長 2.86、幅 2.13、厚 1.17		5YR4/3	10YR6/1	瓷器系
77	55		表土・盛土	炻器	陶片	長 5.02、幅 4.77、厚 2.02		5YR4/3	N/8	瓷器系
78	70		カクラン 11	炻器				7.5YR4/2	5PB5/1	越前、格子文押印
79	71		カクラン 11	炻器				10YR4/1	N/5	越前、格子文押印
80	95		表土・盛土	炻器				2.5YR4/3	N/7	越前、格子文＋「本」哲字文押印
81	43		カクラン 5	瓦質土器	風炉			N/4	N/8	雷文
82	44		カクラン 5	瓦質土器	火鉢・風炉			N/5	5Y8/1	重菱形文、実 45 と同一か
83	45		A2 区精査	瓦質土器	火鉢・風炉			N/5	5Y8/1	重菱形文、実 44 と同一か
84	46		A2 区精査	瓦質土器	火鉢・風炉			N/5	N/8	三脚、実 43 ～ 45 いずれかと同一か
85	48		A2 区精査＋ A3 区精査	瓦質土器	小型鉢（香炉？）	口 8.8、底 7.3	7	5YR6/6	10YR5/2	土師質（内外一部還元・被熱？）、在地産？（海綿骨針）、下向き半菊花文、三足
86	47		A2·3 区 北タチワリ	瓦質土器	浅鉢 or 深鉢	口 26.6	2	7.5YR7/6	2.5Y6/2	土師質、下向き半花文
87	121		SK13	土器	三足鉢？			10YR7/4	10YR7/2	近世以降
88	6		SK24 上層	陶磁器	徳利	頸 3		釉 10Y3/2	2.5YR4/2	近世以降
89	49		B3 区包	土器	サヤ	口 11.5、底 11.8、高 7.8	13	5YR4/6	7.5YR7/4	近世以降
90	77		カクラン 3	陶磁器	片口鉢	口 18.1	8	釉 10Y6/3	2.5Y7/1	近世末（19c）
91	50		B3 区包	土製品	土錘	長 5.14、幅 5.2		2.5Y8/3		近世以降
92	13		板組遺構	土器	七輪	口 21、底 15.7、高 15.1	36	内 2.5YR7/8、外 10R4/6	N/3	近代、珪藻土製、三足、赤色塗料
93	97		B1 区東タチワリ	石製品	硯	長 6.6、幅 2.62、厚 0.53、重 13				スレート（粘板岩）
94	98		カクラン 11	石製品	硯	重 33.7				スレート（粘板岩）
95	103		A1 区北ピット群	石製品	砥石	長 3.51、幅 3.33、厚 2.12、重 46				シェール（頁岩）
96	99		B2 区精査	石製品	砥石	長 11.38、幅 4.51、厚 4.65、重 261				シェール（頁岩）、被熱（赤・煤）
97	100		カクラン 11	石製品	砥石	重 129.3				砂岩（手取層群）、被熱（煤）
98	105		B3 区包	石製品	砥石	重 55				シェール（頁岩）、被熱（煤）
99	101		精査	石製品	砥石	重 28.7				行火転用、軽石質凝灰角礫岩
100	104		A3 区包	石製品	砥石	重 46.6				シェール（頁岩）、被熱（赤・煤）
101	102		カクラン 13	石製品	砥石	重 25.9				シェール（頁岩）
102	106		カクラン 2	石製品	砥石	重 150.9				シルト岩 or 砂岩（手取層群）
103	107		カクラン 11	石製品	火打石	長 8.15、幅 5.88、厚 5.14、重 286.9				蛋白石
104	94		SK21	石製品	石鉢（把手付）	口 33.9、高 28、重 9,600				三脚、軽石質凝灰角礫岩、赤穂谷石？
105	117		SK24 下層	石製品	石鉢（把手付）	重 538.1				軽石質凝灰角礫岩
106	89		A3 区精査	石製品	石鉢	重 2,760				火鉢転用、軽石質凝灰角礫岩、被熱（煤）
107	92		カクラン 11 下層	石製品	石鉢	重 437.6				三脚、軽石質凝灰角礫岩
108	18		SK21	石製品	行火	重 627.9				Ⅰ種、軽石質凝灰角礫岩、被熱（赤・煤）
109	30		P88	石製品	行火	重 321.4				軽石質凝灰角礫岩、被熱（煤）
110	83		カクラン 11 下層	石製品	行火（蓋）	重 354.9				Ⅱ種、軽石質凝灰角礫岩、被熱（赤・煤）
111	84		A2 区包	石製品	行火（蓋）	重 310.9				Ⅱ種、軽石質凝灰角礫岩、被熱（煤）
112	87		A3 区包	石製品	行火	重 423.9				Ⅰ種、軽石質凝灰角礫岩、被熱（赤・煤）
113	85		廃土	石製品	行火	重 241.5				Ⅱ種 a 類、軽石質凝灰角礫岩、被熱（赤・煤）
114	86		表土除去	石製品	行火	重 474.4				Ⅱ種 a 類、軽石質凝灰角礫岩、被熱（赤・煤）
115	88		カクラン 11	石製品	行火	重 783.1				Ⅱ種 b 類、軽石質凝灰角礫岩、被熱（赤・煤）
116	19		SK19	石製品	相輪	重 58.3				軽石質凝灰角礫岩、被熱？
117	91		SK24 下層 +B3 区包	石製品	石臼（下臼）	重 2,412.7				凝灰角礫岩
118	90		表土除去	石製品	石臼（上臼）	重 3,250				横打ち込み式、凝灰角礫岩
119	93		カクラン 11	石製品	管状	重 1,182.1				軽石質凝灰角礫岩
120	96		P90	石製品	板状	長 41、幅 43.3、厚 5.6、重 10,700				軽石質凝灰角礫岩
121	122		B3 区精査	鉄製品	包丁	幅 2.74、重 58.4				近世以降
122	123		カクラン 1	鉄製品	包丁	幅 5.92、重 148.6				近世以降
123	124		B2 区精査	鉄製品	柄？	幅 1.71、重 28.9				
124	115		SK13	羽口（炉壁付）		長 15.1、重 825.7				メタル度 :M、磁着度 :4
125	く 4	13	SK17	椀形鍛冶滓（含鉄）		長 6.0、幅 7.3、厚 2.9、重 177.9				メタル度 :H、磁着度 :5
126	た 4	4	SK17	椀形鍛冶滓（含鉄）		長 8.9、幅 10.4、厚 4.5、重 489.9				メタル度 :H、磁着度 :5、土師器片付着
127	た 7	7	SK17	椀形鍛冶滓（含鉄）		長 7.1、幅 11.9、厚 4.4、重 338.6				メタル度 :H、磁着度 :3
128	た 5	5	SK17	椀形鍛冶滓（含鉄）		長 9.3、幅 11.1、厚 4.2、重 431.2				メタル度 :H、磁着度 :2
129	た 8	8	SK24 sec	椀形鍛冶滓（含鉄）		長 6.6、幅 11.5、厚 3.8、重 386.5				メタル度 :H、磁着度 :8
130	た 9	12	P58	椀形鍛冶滓（含鉄）		長 6.7、幅 5.6、厚 4.0、重 208.9				メタル度 :H、磁着度 :6
131	た 2	2	A1 区 北ピット群	椀形鍛冶滓（含鉄）		長 9.7、幅 11.4、厚 5.3、重 578.4				メタル度 :H、磁着度 :8
132	た 10	15	P94	椀形鍛冶滓（含鉄）		長 5.2、幅 7.7、厚 2.9、重 104.8				メタル度 :H、磁着度 :7
133	た 6	6	P94	椀形鍛冶滓（含鉄）		長 7.6、幅 11.7、厚 4.0、重 345.6				メタル度 :H、磁着度 :5

掲載	実測	整理	出土位置	分類	器形	寸法（長さ cm・厚さ g）	残/36	表面色調	断面色調	備考
134	く 1	10	B3 区 EW アゼ 包含層	輪形鍛冶滓（含鉄）		長 6.7、幅 9.1、厚 2.8、重 273.3				メタル度 H、磁着度 4
135	く 3	11	B3 区 EW アゼ 包含層	輪形鍛冶滓（含鉄）		長 5.8、幅 8.5、厚 3.0、重 266.8				メタル度 H、磁着度 4
136	た 1	1	表土除去	椀形鍛冶滓（含鉄）		長 9.3、幅 15.4、厚 5.6、重 727				メタル度 H、磁着度 3
137	く 2	9	B2 区 精査	椀形鍛冶滓（含鉄）		長 7.4、幅 9.9、厚 3.0、重 284.5				メタル度 H、磁着度 7
138	た 3	3	カクラン 11	椀形鍛冶滓（含鉄）		長 8.8、幅 8.9、厚 6.3、重 554.1				メタル度 H、磁着度 7
139	く 5	14	カクラン 11	椀形鍛冶滓（含鉄）		長 6.9、幅 6.9、厚 2.0、重 163.7				メタル度 H、磁着度 4
140	拍 2		P24	銭貨		縁 2.52、穴 2.53、重 2.79				皇宋通寶、北宋銭、1039 年初鋳
141	拍 3		カクラン 9	銭貨		縁 2.49、穴 2.48、重 2.87				政和通寶、北宋銭、1111 年初鋳
142	拍 7		精査	銭貨		縁 2.43、穴 2.44、重 2.66				寛永通寶
143	拍 5		カクラン 3	銭貨		縁 2.41、穴 2.41、重 3.4				寛永通寶
144	拍 4		表土・盛土	銭貨		縁 2.28、穴 2.27、重 2.05				寛永通寶
145	拍 8		精査	銭貨		縁 2.34、穴 2.33、重 2.55				□□通寶
146	拍 9		精査	銭貨		縁 2.27、穴 2.26、重 1.76				
147	拍 6		A1・B1 区包	銭貨		縁 2.53、穴 2.54、重 5.69				2 枚重複
148	拍 1		攪土	銭貨		縁 1.91、穴 1.9、重 2.4				十銭アルミ青銅貨、昭和 19 年発行
		16	カクラン 13	鍛冶滓（含鉄）		長 7.6、幅 5.8、厚 3.1、重 162.3				メタル度 H、磁着度 7
		17	B2 区 精査	鍛冶滓（含鉄）		長 6.7、幅 5.7、厚 2.4、重 99.8				メタル度 H、磁着度 6
		18	A1 区 北ピット群	鍛冶滓（含鉄）		長 5.7、幅 4.3、厚 3.4、重 99.8				メタル度 H、磁着度 5
		19	A2 区 精査	鍛冶滓（含鉄）		長 6.6、幅 4.5、厚 2.8、重 80.8				メタル度 H、磁着度 5
		20	カクラン 9	鍛冶滓（含鉄）		長 6.9、幅 6.4、厚 2.6、重 79.5				メタル度 H、磁着度 7
		21	カクラン 13	鍛冶滓（含鉄）		長 6.4、幅 4.4、厚 1.9、重 63.0				メタル度 H、磁着度 1
		22	SK17	鍛冶滓（含鉄）		長 6.3、幅 4.9、厚 1.8、重 61.4				メタル度 H、磁着度 5
		23	SK19	鍛冶滓（含鉄）		長 5.1、幅 4.4、厚 1.6、重 56.4				メタル度 H、磁着度 5
		24	B2 区 精査	鍛冶滓（含鉄）		長 6.4、幅 3.9、厚 1.9、重 54.9				メタル度 H、磁着度 6
		25	SK17	鍛冶滓（含鉄）		長 4.9、幅 4.1、厚 2.4、重 49.9				メタル度 M、磁着度 4
		26	B3 区 EW アゼ 包含層	鍛冶滓（含鉄）		長 6.5、幅 3.6、厚 2.7、重 47.5				メタル度 H、磁着度 7
		27	P8	鍛冶滓（含鉄）		長 5.7、幅 4.3、厚 1.4、重 40.5				メタル度 H、磁着度 7
		28	A1 区 北ピット群	鍛冶滓（含鉄）		長 4.1、幅 3.4、厚 2.3、重 38.9				メタル度 M、磁着度 9
		29	B2 区 精査	鍛冶滓（含鉄）		長 4.5、幅 3.3、厚 2.8、重 36.5				メタル度 H、磁着度 4
		30	カクラン 11	鍛冶滓（含鉄）		長 4.2、幅 3.1、厚 2.6、重 29.6				メタル度 H、磁着度 5
		31	B3 区 EW アゼ 包含層	鍛冶滓（含鉄）		長 4.2、幅 3.7、厚 1.7、重 25.2				メタル度 H、磁着度 5
		32	A3 区 包含層	鍛冶滓（含鉄）		長 3.0、幅 2.1、厚 2.0、重 22.7				メタル度 H、磁着度 4
		33	カクラン 9	鍛冶滓（含鉄）		長 3.6、幅 2.7、厚 1.9、重 19.2				メタル度 H、磁着度 5
		34	P6	鍛冶滓（含鉄）		長 3.3、幅 2.6、厚 1.8、重 15.6				メタル度 H、磁着度 5
		35	B2 区 精査	鍛冶滓（含鉄）		長 3.2、幅 2.6、厚 2.1、重 17.0				メタル度 H、磁着度 5
		36	SK23	鍛冶滓（含鉄）		長 2.7、幅 2.7、厚 1.6、重 10.7				メタル度 H、磁着度 4
		37	B2 区 精査	鍛冶滓（含鉄）		長 3.5、幅 2.1、厚 0.9、重 9.5				メタル度 H、磁着度 4
		38	カクラン 9	鍛冶滓（含鉄）		長 2.4、幅 2.1、厚 1.6、重 6.2				メタル度 H、磁着度 2

※「残 /36」は遺構、口縁部の残存率を示し、ほかの部位の場合はその部度付記

参考文献

上田秀夫 1982「14 ～ 16 世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』第 2 号 日本貿易陶磁研究会

珠洲焼資料館 1989『珠洲の名陶』

垣内光次郎 1990「中世北陸の暖房文化」『石川考古学研究会々誌』第 33 号 石川考古学研究会

藤澤良祐 1991「瀬戸古窯址群 II －古瀬戸後期様式の編年－」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要 X』 瀬戸市歴史民俗資料館

出光美術館 1994『越前古陶とその再現』平凡社

北陸中世土器研究会 1997『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』桂書房

北陸中世考古学研究会 1999『中世北陸の石文化 I』第 12 回北陸中世考古学研究会資料集

水澤幸一 1999「瓦器、その城館的なるもの－北東日本の事例から－」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第 9 集

石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター 2004『小松市幸町遺跡』

全国シンポジウム「中世窯業の諸相」実行委員会 2005『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』発表要旨集・資料集

小松市教育委員会 2005『幸町遺跡 I』

小松市教育委員会 2006『幸町遺跡 II』

滝川重徳 2007「北陸の瓦質土器」『瓦質土器の出現と定着』第 26 回中世土器研究会 日本中世土器研究会

愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史 別編窯業 2 中世・近世 瀬戸系』

小松市教育委員会 2014『犬川遺跡』

小松市教育委員会 2015『小松市内遺跡発掘調査報告書 XI』

(公財) 石川県埋蔵文化財センター 2019『北陸にみる近世成立期の土器・陶磁器様相－城下町とその周辺遺跡の土師器皿（かわらけ）を中心に－』平成 30 年度 環日本海文化交流史調査研究集会

調査区西側完掘状況（南から）

P4 土層状況（南から）

P6 土層状況（南から）

SX03,SK04 検出状況（北から）

SK04A 土層断面（西から）

SD01 土層断面（南から）

調査区北側断面（南から）

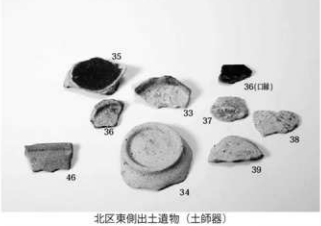
SK02,SK03,SK04 出土遺物

P4,P5,P6 出土遺物

SX02,SX03 出土遺物

落ち込み周辺，調査区東側出土遺物

北区東側出土遺物（須恵器）

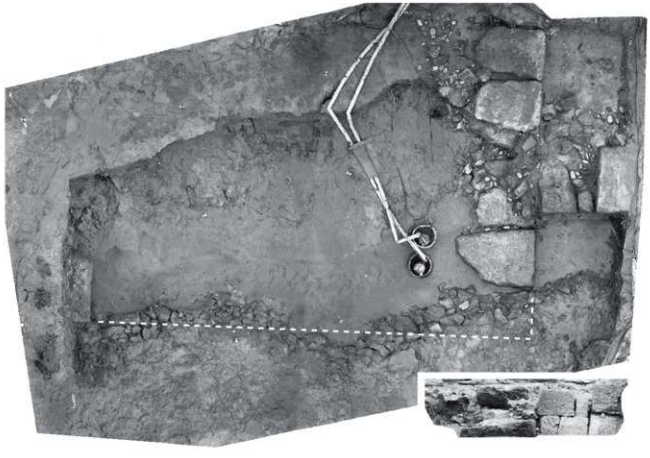


北区東側出土遺物（土師器）

北区出土遺物

砥石

錘



造成土の重取りと搬出状況

栗石検出作業

石垣掘り出し作業

石垣と栗石の完掘状況

A2-B2 区 完掘状況（南から）

A3-B3 区 完掘状況（南から）

A1-B1 区 完掘状況（南から）

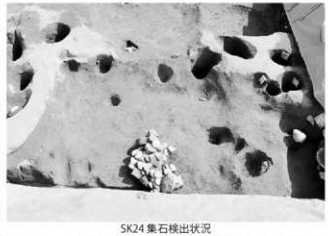
遺構検出作業状況

SK13 完掘状況

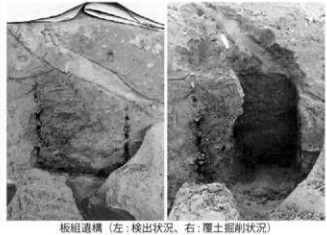
SK17 完掘状況

SK18 礎石検出状況

SK21 遺物出土状況


SK24 集石検出状況

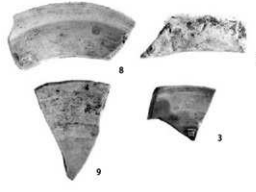
P-90 板石検出状況


板組遺構（左：検出状況、右：覆土掘削状況）

14

15

21


8
12
9
3

81

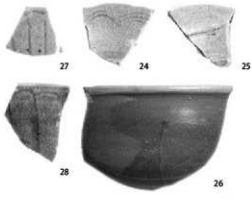
82

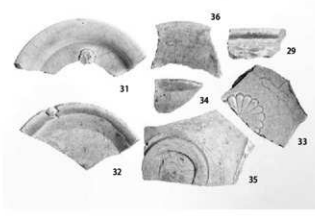
83

84

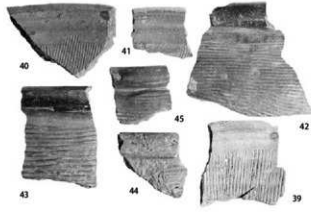
86

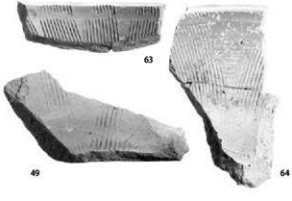
85

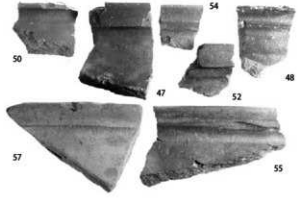

27
24
25
28
26


36
29
31
34
33
32
35

38
37
30


40
41
45
42
43
44
39


63
49
64


54
50
47
52
48
57
55

141
140
142
144
121
123
122

124

石製品 集合

撮影：田邉朋宏

報告書抄録

ふりがな	こまつしないいせきはっくつちょうさほうこくしょ 16
書名	小松市内遺跡発掘調査報告書 XVI
副書名	古府しのまち遺跡・小松城跡・本折城跡
巻次	
編・著者名	下濱 貴子・宮田 明・横幕 真
編集機関	石川県小松市埋蔵文化財センター
所在地	〒923-0075 石川県小松市原町ト77番地8 TEL (0761) 47-5713
発行年月日	西暦 2021 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
こふしのまち 遺跡	いしかわけんこまつし 石川県小松市 こふまち 古府町	17203	305400	36° 24′ 42″	136° 29′ 53″	2016.11.28 ～ 2017.01.09	125	個人住宅
こまつじょうあと 小松城跡	いしかわけんこまつし 石川県小松市 まるのうちまち 丸内町	17203	300800	36° 24′ 46″	136° 26′ 33″	2017.12.04 ～ 2017.12.22	70	個人住宅
もとおりじょうあと 本折城跡	いしかわけんこまつし 石川県小松市 かみもとおりまち 上本折町	17203	309700	36° 23′ 43″	136° 26′ 54″	2018.04.10 ～ 2018.04.30	115	個人住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
古府しのまち	集落	古代	土坑、柱穴	須恵器、土師器、陶(土)錘、砥石	
要約	遺跡としては、梯川流域にみられる弥生から古代、中世にかけての複合遺跡。				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小松城	城館	近世	石垣、堀		中土居の調査
要約	絵図からある程度の精度で縄張りを地図上に再現できるが、ディテールの修正は必要。				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
本折城	城館	中世	土坑、柱穴(礎石)、板組	須恵器、土師器、陶磁器、炉器、瓦質土器、石製品、鉄製品、鍛冶関連遺物、銭貨	その他、弥生土器、近世以降の遺物
要約	中世城館に関する遺構は検出されなかったが、中世とそれ以降の遺物が多数出土。				

小松市内遺跡発掘調査報告書 XVI

古府しのまち遺跡・小松城跡・本折城跡

令和３年３月31日　発行

編集・発行　石川県小松市埋蔵文化財センター
石川県小松市原町ト77-８　TEL (0761) 47-5713

印　　刷　株式会社ゲンダ美術印刷
石川県小松市丸の内町2-32　TEL (0761) 22-7031